

IBM DB2[®] Universal Database[™]



リリース情報

バージョン 8.1 フィックスパック 6

IBM DB2[®] Universal Database[™]



リリース情報

バージョン 8.1 フィックスパック 6

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典：	IBM DB2 Universal Database Release Notes Version 8.1 FixPak 6
発行：	日本アイ・ビー・エム株式会社
担当：	ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2002 - 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

リリース情報について	vii	6	コード化文字セット ID (CCSID) 5039 用の代替 Unicode 変換表	8
本リリースの概要	1	6	コード化文字セット (CCSID) 5039 の Unicode 変換表から Microsoft 変換表への置換	9
6 本リリースの新機能	1	6	コード化文字セット ID (CCSID) 954 用の代替 Unicode 変換表	10
6 新規の Unicode データベースの作成時のさらに別の照合シーケンスのサポート	1	6	コード化文字セット (CCSID) 954 の Unicode 変換表から Microsoft 変換表への置換	11
6 製品フィックスの歴史	2	6	MVS オペレーティング・システムの非サポート	11
6 後方互換性	2	6	DB2 UDB for AIX 4.3.3 および 5.1 以上の AIX C++ バージョン 6 のランタイムの必要性	12
3 代替フィックスパック (Linux および UNIX) データウェアハウス・センターの旧サーバー・サポートの制限	2	6	Java 共用ライブラリーへのアクセス (Linux)	12
4 Visual Warehouse 5.2 DB2 プログラム「DB2 UDB EEE へのフラット・ファイルの VW 5.2 ロード (AIX のみ)」はサポートされていない	4	5	バックアップおよびリストア (Linux 390) ERwin 4.x メタデータ・ブリッジ	13
4 DB2 Universal Database バージョン 7 サーバー・アクセス	4	5	Hummingbird Exceed を使ったデベロップメント・センターへのアクセス時のビュー連結の使用可能化	13
4 DB2 UDB for OS/390 バージョン 6 および DB2 UDB for z/OS バージョン 7 での SQLJ および SQL アシストのサポートに必要なデベロップメント・センター APAR	5	2	インストール、移行、アップグレード、構成に関する情報	15
5 コマンド・センターおよびバージョン 7 サーバー	5	2	インストールに関する情報	15
5 DB2 UDB から起動される 2 つのバージョンの SQL Assist	5	5	DB2 UDB のインストール (AIX)	15
Unicode サーバー動作の変更	6	3	DB2 UDB のインストール (Linux)	15
クラシック・コネクトは使用不可	6	2	さらに別のアジア言語のフォントのインストール (Linux)	15
製品の互換性	6	2	db2setup コマンドを使った製品の追加に対する制約事項	17
2 Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In	6	5	Spatial Extender フィックスパックのダウンロードと解凍	18
6 WebSphere Application Server による SQLJ プログラム内の SQL ステートメントの実行	6	6	フィックスパックの適用後の Query Patroller パッケージのバインディング	19
1 Microsoft Visual Studio、Visual C++	6	6	フィックスパック 3 レベル以上の Query Patroller のインストール	19
64 ビット・オペレーティング・システムで必要な Microsoft XP のフィックス	7	6	DB2 Web ツール	19
2 Windows 64 ビット・オペレーティング・システム上の CLI および ODBC	7	6		
2 サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成	7	6		
4 Windows XP オペレーティング・システム	8	6		

インストール時のオプションではない言語 の DB2 インフォメーション・センターの インストール.	20	パーティション・データベース上の NUM_LOG_SPAN 構成パラメーター.	28
DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーション・インストー ルの制約事項 (Windows).	20	複数フィックスバック環境での dasdrop コ マンドに対する制限事項.	28
各国語バージョンの DB2 UDB 用の MDAC ファイルのインストール.	21	データウェアハウス・センターの中国語 (簡体字) 非サポート.	30
移行に関する情報.	21	リモート・オブジェクトの日本語名.	30
1 DataJoiner またはレプリケーション使用時 の DB2 Universal Database の移行.	21	Clean Data トランスフォーマーの制約事項 ウェアハウス・エージェントを使った Client Connect ウェアハウス・ソースの複 製とアクセス.	30 31
1 DB2 バージョン 8 の Windows 32 ビット のデータベースから Windows 64 ビットへ の移行.	21	インターバルを置いて実行するウェアハウ ス・プロセスのスケジューリング.	32
2 旧バージョンからの XML Extender の移行	22	3 インポートとエクスポートに関するデータ ウェアハウス・センターの制約事項.	32
4 データベースの移行 (HP-UX on IA64).	22	6 バージョン 8.1.2 以降のインストール後の ウェアハウス・コントロール・データベー スの初期化.	32
既知の制限、問題および予備手段.	23	6 Cube Views サンプル・アプリケーション とサンプル・ソースの相違.	32
制限事項.	23	4 列のロードおよびインポート・ページでの IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポー ト.	32
64 ビット・オペレーティング・システムで のデベロップメント・センターの制約事項.	23	ロード操作の失敗時の誤ったタスク・セン ター・インディケーターの表示.	33
2 デベロップメント・センター (Linux).	23	GUI ツールの最低限の表示設定.	33
4 二重引用符を使ったストアド・プロシー ジャーのデバッグ.	23	2 インフォメーション・カタログ表はパーテ ィション化しない.	33
4 デベロップメント・センターで Java ルー チンをコンパイルするのに必要なパスの設 定.	23	2 DYN_QUERY_MGMT の無効時の Query Patroller の制約事項.	33
6 Java ストアド・プロシージャーを同時に 実行してデバッグする場合のデベロップメ ント・センターの制限事項.	24	5 今後の Query Patroller 結果表での DB2QPRT スキーマの使用.	34
6 DB2 UDB for z/OS または DB2 UDB for OS/390 サーバーでの LOB ロケーターの使 用.	25	5 ALTER WRAPPER SQL ステートメントの 非サポート.	34
5 接続中のログイン成功レポート時の障害 (AIX).	26	5 ヘルス・インディケーターの制約事項.	34
4 JDBC ドライバーの制限事項 (HP-UX).	26	システム・モニター・スナップショット UDF の制約事項.	34
3 バージョン 8 における SNA サポートの制 限.	26	5 確認済みの問題とその対処法.	35
5 Linux でのツール・カタログ・データベー ス作成の非サポート (Linux AMD64).	27	DB2 Universal Database Workgroup Server Edition 用の DB2 ライセンス・ポリシー.	35
5 ツール・カタログ・データベース作成の非 サポート (AIX, Solaris オペレーティング 環境、および HP-UX).	27	5 Linux で必要な IBM Developer Kit for Java 1.3.1 (x86、32 ビット).	35
5 Workgroup Server Edition 64 ビット・サー バー・インスタンスの制約事項.	28	5 中国語 (簡体字) ロケール (AIX).	36
5 CLI の非同期実行.	28	5 中国語 (簡体字) ロケール (Red Hat Linux)	37
		5 Merant Driver Manager の非互換性 (UNIX)	38

データ・リンク・サーバーのバックアップ での Tivoli Storage Manager アーカイブ・ サーバー (AIX、Solaris オペレーティング 環境) の非使用	40	ビジネス・インテリジェンス・チュートリ アルの更新	54
4 SQLFLAG(STD) プリコンパイラー・オプシ ョン・エラー	41	6 ウェアハウス・ログ・ファイルのページ限 度の設定	54
4 SQL ルーチン・コンパイル・コマンド 用 5 DB2 UDB パス (Windows)	41	4 CURSOR ロードに対するデータウェアハウ ス・センターのサポート	55
1 ドキュメンテーションの全カテゴリーをイン ストールしていない場合の AIX におけ るドキュメンテーション検索の障害	42	4 GUI ツール	55
1 Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション 検索の問題	42	5 コントロール・センターのプラグインのサ ポート	55
1 DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示 zSeries サーバーでの GUI ツールの非サポ ート (Linux)	44	5 メッセージの解説	55
4 タグ言語ファイルのインポート時のインフ ォメーション・カタログ・センター・ロ グ・ファイルの非生成	44	5 バージョン 8.1.4 インフォメーション・セ ンター・メッセージ・トピック	55
6 Query Patroller パッケージのバインディン グ	45	5 ADM メッセージの更新情報	55
1 機密保護機能のある環境 (Windows)	45	5 SQL メッセージの追加	55
2 XML Extender のサンプル・プログラムの 名前変更	46	5 DBI メッセージの更新情報	56
2 非ユニーク属性名およびエレメント名の入 った XML Extender 内の文書の分解	47	5 Query Patroller	59
4 DB2 Connect の使用時の SNA と TCP/IP 5 の相違	50	5 Query Patroller のヒストリカル・データ生 成プログラムの実行より前の Explain 表の 作成	59
ドキュメンテーションの更新	51	5 履歴分析のための Query Patroller ログ・フ ァイルの検査	59
管理: パフォーマンスのチューニング	51	6 動的照会クラスの更新	59
6 DB2_ENABLE_BUFDPD レジストリー変数の デフォルト値	51	6 ネストされた照会の動作	60
6 アプリケーション開発: コール・レベル・イン ターフェース (CLI)	51	6 ヒストリカル・データ生成プログラムの異 常シャットダウン	60
6 MapDateDescribe CLI/ODBC 構成キーワー ド	51	6 SQL ステートメント・タイプ別の制限事項 システム・モニター	61
6 MapTimeDescribe CLI/ODBC 構成キーワー ド	52	6 DB2_SNAPSHOT_NOAUTH レジストリー 変数に取って代わる SYSMON_GROUP デ ータベース・マネージャー構成パラメータ ー	61
6 MapTimestampDescribe CLI/ODBC 構成キー ワード	52	6 SQL の解説	61
6 コマンドの解説	53	5 SQL の制限事項	61
6 db2inidb - ミラーリングされたデータベー ス・コマンドの初期化	53	6 XML Extender	61
6 データウェアハウス・センター	54	6 XMLVARCHAR UDT サイズ限度の撤廃 新しい環境変数: 6 DB2DXX_MIN_TMPFILE_SIZE	62
		付録 A. DB2 UDB フィックスパック CD の ディレクトリー構造	63
		付録 B. IBM と連絡をとる	67
		製品情報	67
		付録 C. 特記事項	69
		商標	72

リリース情報について

内容:

リリース情報には、以下の DB2® バージョン 8 の製品についての情報が記載されています。

DB2 Universal Database™ Personal Edition
DB2 Universal Database Workgroup Server Edition
DB2 Universal Database Workgroup Server Unlimited Edition
DB2 Universal Database Enterprise Server Edition
DB2 Personal Developer's Edition
DB2 Universal Developer's Edition
DB2 Warehouse Manager
DB2 Warehouse Manager Sourcing Agent for z/OS™
DB2 Data Links Manager
DB2 Net Search Extender
DB2 Spatial Extender
DB2 Intelligent Miner™ Scoring
DB2 Intelligent Miner Modeling
DB2 Intelligent Miner Visualization
DB2 Connect™ Application Server Edition
DB2 Connect Enterprise Edition
DB2 Connect Personal Edition
DB2 Connect Unlimited Edition
DB2 Query Patroller

バージョン情報:

1 最新のドキュメンテーションは、ブラウザでアクセスする DB2 インフォメーショ
1 ン・センターの最新バージョンに掲載されています。最新のドキュメンテーションをダ
1 ウンロードする URL は、この項の後の『追加リソース』の項に記載されています。

1 DB2 インフォメーション・センターのドキュメンテーションに入っている改訂マーク
1 は、バージョン 8.1 の PDF 情報が最初に掲載された後に追加または変更されたテキス
1 トであることを示しています。縦線 (|) は、バージョン 8.1 が最初にリリースされたと
1 きに追加された情報であることを示しています。数字標識の 1 や 2 は、フィックスパ
1 ックまたはこれと同じ番号で終わるレベルで追加された情報であることを示していま
1 す。例えば 1 は、フィックスパック 1 で追加または変更された情報を示し、2 は、バ
1 ージョン 8.1.2 で変更された情報であることを示します。

6 ディレクトリー・パス:

6 Windows ベースのシステムでは、ディレクトリー・パス内のディレクトリーをそれぞれ
6 区切るのに円記号 (¥) が使われます。UNIX および Linux ベースのシステムでは、区
6 切り文字としてスラッシュ (/) が使われます。プラットフォームを区別した情報の場

6 合、「リリース情報」では上記の規則に従っています。しかしプラットフォームを限定
6 しない情報の場合、ここに示されているものとは異なるディレクトリー・パスを入力す
6 6 る必要があることがあります。たとえば、Windows ベースのシステムの場合には、「リ
6 6 リース情報」でスラッシュ (/) が使われていても、円記号 (¥) を使ってディレクトリ
6 6 ー・パスを入力する必要があります。逆に、UNIX または Linux ベースのシステムの場合
6 6 には、「リリース情報」で円記号 (¥) が使われていても、スラッシュ (/) を使ってデ
6 6 イレクトリー・パスを入力する必要があります。

6 **DB2 Information Integrator:**

6 フェデレーテッド・システム、Web サービス、およびメタデータ管理をはじめとして、
6 DB2 Information Integrator に関する確認済みの問題点の詳細は、
6 <http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html> の「DB2 Information
6 Integrator リリース情報」を参照してください。

その他の情報源:

1 フィックスパック 1 の時点で、PDF 形式の「*Data Links Manager* 管理ガイドおよび
1 リファレンス」(SC88-9169-01) が更新されましたが、これは、
1 <http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> の DB2 サポート・サイトか
1 らダウンロードすることができます。

DB2 Life Science Data Connect 製品の資料は、IBM ソフトウェア・サイト
<http://www.ibm.com/software/data/db2/lifesciencesdataconnect/> からダウンロードすることが
できます。

DB2 ドキュメンテーションを HTML 形式で参照するには、
<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> からオンラインの DB2 HTML インフォ
メーション・センターにアクセスしてください。

また、上記サイトから「*DB2 HTML* ドキュメンテーション」の CD イメージをダウン
ロードして、ご使用のシステムに DB2 HTML インフォメーション・センターをインス
トールすることもできます。DB2 HTML ドキュメンテーションは、リリースごとに更
新されます。最新のドキュメンテーションについては、オンラインの DB2 HTML イン
フォメーション・センターにアクセスするか、または「*DB2 HTML* ドキュメンテーショ
ン」の CD イメージをダウンロードしてシステムにインストールしてください。PDF
ドキュメンテーションよりも、HTML のインフォメーション・センターのほうがより頻
繁に更新されます。

DB2 デベロップメント・センターと DB2 for z/OS の詳細については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/os390/spb/> に記載されています。

DB2 ファミリー製品の最新情報については、購読無料の *DB2 Magazine* を参照してく
ださい。このマガジンのオンライン版は、<http://www.db2mag.com> から入手することがで
きます。このサイトに、購読方法に関する説明もあります。

本リリースの概要

6 本リリースの新機能

6 この項では、本リリースの DB2 Universal Database から利用可能になった拡張機能の概
6 略を述べています。

6 **新規の Unicode データベースの作成時のさらに別の照合シーケンスのサポー 6 ト**

6 DB2 UDB バージョン 8 のフィックスパック 6 では、新規の Unicode データベースの
6 作成時に次のようないくつかの新規の照合シーケンスがサポートされます。

6 **UCA400_NO**

6 このコレクターは、暗黙で正規化を ON に設定された Unicode 標準バージョ
6 ン 4.00 をベースとする Unicode Collation Algorithm (UCA) を実装していま
6 す。

6 **UCA400_LSK**

6 このコレクターもまた、UCA バージョン 4.00 を実装していて、スロバキア語
6 文字をソートできるよう調整されています。

6 **UCA400_LTH**

6 このコレクターもまた、UCA バージョン 4.00 を実装していますが、タイ王国
6 辞書の順番に沿ってすべてのタイ語文字をソートします。

6 UCA の詳細は、Unicode Consortium の Web サイト <http://www.unicode.org> に掲載され
6 た Unicode Technical Standard #10 に述べられています。

6 今後は、CREATE DATABASE コマンドを使って新規の Unicode データベースを作成
6 する場合、COLLATE USING パラメーターに UCA400_NO、UCA400_LSK、または
6 UCA400_LTH を指定することができます。

6 今後は、sqlcrea C API を使って新規の Unicode データベースを作成する場合、
6 SQLEDBDESC データ構造の SQLDBCSS フィールドに
6 SQL_CS_UCA400_NO、SQL_CS_UCA400_LSK、または SQL_CS_UCA400_LTH を指定
6 することができます。

製品フィックスの歴史

本フィックスパックで扱われているプログラム診断依頼書 (APAR) のリストを見るには、以下の Web ページにアクセスしてください。

<http://www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/winos2unix/support/versionfixpak.d2w/report>

後方互換性

代替フィックスパック (Linux および UNIX)

DB2 Universal Database バージョン 8 以前はフィックスパックには、1 つの固定ロケーションにインストールされた DB2 Universal Database パッケージまたはファイル・セットを更新する働きしかありませんでした。このことは基本的に、フィックスパックをインストールすることによって、フィックスパック内にある更新済みファイルで既存のファイルが置き換えられるということを意味します。1 つのシステムに対して複数のレベルの DB2 フィックスパックを対応させることはできませんでした。今後は、1 つのシステム内で複数のフィックスパック・レベルの DB2 UDB (ESE) の存在が可能になります。バージョン 8.1.2 より実稼働環境でサポートされるようになったこのフィーチャーは、次の 2 種類のフィックスパックの使用によって実効化されます。

通常のフィックスパック

- ESE で使えるだけでなく、関連プラットフォーム用にサポートされるどの DB2 V8.1 製品でも使用することができます。
- AIX® では /usr/opt/db2_08_01 ディレクトリーに、他のプラットフォームでは /opt/IBM/db2/V8.1 に、既存のインストール内容の上に直接インストールすることができます。

代替フィックスパック

- DB2 Universal Database ESE のまったく新規のコピーとしてインストールすることができます。
- 通常の DB2 Universal Database のインストール・ロケーションではなく、事前定義したロケーションにインストールします。

注:

1. 複数フィックスパックのインストールは不要な環境では、そのようなインストールを行う必要はありません。
2. IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition (ESE) for Linux and UNIX® バージョン 8.1.2 以降、複数フィックスパックとしてインストールされたフィックスパックが、実稼働環境でサポートされるようになりました。

複数フィックスパック・インスタンスを別のフィックスパック・レベルに更新するには、次のいずれかの操作を実行します。

- 3 • 適切な通常フィックスパックを一般出荷版 (GA) インストールに上書きインストール
- 3 してから、既存の GA パスから **db2iupdt** を実行してインスタンスを更新する。
- 3 • 適切な代替フィックスパックを独自のユニーク・パスにインストールし、そのパスから
- 3 **db2iupdt** を実行してインスタンスを更新する。

- 3 代替フィックスパックのダウンロードの詳細については、IBM® サポート・サイト
- 3 (<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) を参照してください。

データウェアハウス・センターの旧サーバー・サポートの制限

DB2 Universal Database (DB2 UDB) Enterprise Server Edition バージョン 8 データウェアハウス・センターでの旧サーバー・サポートには、以下の制限があります。

ラージ・オブジェクト (LOB) サポート

- DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 より前のサーバーでウェアハウス・コントロール・データベースを使用している場合、LOB を処理することはできません。ウェアハウス・コントロール・データベースを正しいレベルにアップグレードする必要がありますが、あるいは DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 ウェアハウス・サーバーがインストールされているシステムにコントロール・データベースを移動すれば、そのシステムからウェアハウス・コントロール・データベースをローカル側で使用することもできます。
- LOB をデータウェアハウス・センターと DB2 UDB 間で移動するには、DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8 にアップグレードする必要があります。

システム・ネットワーク体系 (SNA) のサポート

SNA を使用してウェアハウス・ソースおよびターゲットに接続する場合は、構成を SNA を経由する TCP/IP に変更するか、または Windows NT® ウェアハウス・エージェントを使用する必要があります。

EXPORT および LOAD ユーティリティーのサポート

ウェアハウス・エージェントをアップグレードする場合は、ソース・ターゲット・データベースもアップグレードするか、またはウェアハウス・プロセス内の EXPORT および LOAD ユーティリティーを SQL Select および Insert ステップで置き換えなければなりません。SQL Select および Insert ステップは、後ろに SELECT および INSERT ステートメントが続く DELETE* ステートメントを使用します。SQL Select および Insert ステップでは、すべてのトランザクションをデータベースでログ記録する必要があります。そのため、SQL Select および Insert ステップのパフォーマンスは、EXPORT および LOAD ユーティリティーの場合ほど効率はよくありません。

Visual Warehouse 5.2 DB2 プログラム「DB2 UDB EEE へのフラット・ファイルの VW 5.2 ロード (AIX のみ)」はサポートされていない

Visual Warehouse 5.2 DB2 EEE ロード・ステップは、DB2 バージョン 8 ではサポートされていません。

区切り文字付きファイルをバージョン 8 のパーティション化された表にロードするには、以下のステップを実行します。

1. ターゲット・データベースまたはターゲット表を DB2 UDB バージョン 8 に移行します (まだバージョン 8 になっていない場合)。データベースを移行する一つの方法としては、コマンド行から **db2move** コマンドを実行します。
2. Visual Warehouse 5.2 EEE ロード・ステップのプロパティ・ウィンドウで、「パラメーター (Parameters)」タブを選択し、「列区切り文字 (Column delimiter)」、「ストリング区切り文字 (String delimiter)」、および「小数点区切り文字 (Decimal delimiter)」パラメーターをメモします。
3. 新しいロード・ステップのための新規プロセスを作成するか、またはオリジナルのプロセスを使用します。新規プロセスを作成する予定の場合は、ソース・ファイルとターゲット表を新規プロセスに追加します。また、新規プロセスを適切なウェアハウス・セキュリティー・グループに追加します。
4. ご使用のプロセス内に DB2 ロード・ステップを作成します。
5. ソースとターゲットをステップに接続します。
6. ロード・ステップのプロパティ・ウィンドウを開き、「ロード・モード (Load mode)」フィールドで PARTITIONED を選択します。必要な場合、「列 (Column)」、「文字ストリング (Character strings)」、および「小数点 (Decimal point)」の各フィールドを、旧ステップの「列区切り文字 (Column delimiter)」、「ストリング区切り文字 (String delimiter)」、および「小数点区切り文字 (Decimal delimiter)」で使用していた値に更新します。
7. 「進む (Advanced)」をクリックして、ロード・ウィザードを開始します。「操作 (Operation)」ページから、「データの分割とロード (Split and load data)」を選択します。
8. 「タイプ (Type)」ページから、「表データの置換 (Replace table data)」を選択します。
9. ロード・ウィザードの残りのデフォルト値を受け入れます。
10. サマリー・ページに、最終的なロード・コマンドが表示されます。最終的なロード・コマンドを検討して「完了」をクリックします。
11. プロパティ・ウィンドウを閉じます。

DB2 Universal Database バージョン 7 サーバー・アクセス

バージョン 8 クライアントから Linux、UNIX、または Windows® オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーにアクセスするには、サ

サーバーにバージョン 7 フィックスパック 8 以降をインストールし、**db2updv7** コマンドを実行する必要があります。バージョン 7 フィックスパックのインストール方法については、バージョン 7 フィックスパックの **Readme** およびリリース情報を参照してください。

DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントから DB2 Connect バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

DB2 UDB for OS/390 バージョン 6 および DB2 UDB for z/OS バージョン 7 での SQLJ および SQL アシストのサポートに必要なデベロップメント・センター APAR

Windows または UNIX オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 8 用の Application Development Client でデベロップメント・センターを使用するときは、SQLJ および SQL アシストのサポートを有効化するために以下の APAR をインストールする必要があります。

DB2 UDB for z/OS バージョン 7

- PQ65125 - Java SQLJ ストアド・プロシージャを構築するための SQLJ サポートを提供します。
- PQ76858 - SQL Assist のサポートを提供します。

DB2 UDB for OS/390® バージョン 6

- PQ76858 - SQL Assist のサポートを提供します。

コマンド・センターおよびバージョン 7 サーバー

バージョン 8 のコマンド・センターでは、「データベース接続 (Database connection)」フィールドに関連付けられた [...] (省略符号) ボタンをクリックすると、警告メッセージとダンプ・ファイルが生成される場合があります。この動作は、バージョン 7 サーバーと連動するバージョン 8 ツールの制限や制約事項と関係しています。[...] をクリックすると、「データベースの選択 (Select Database)」ウィンドウが開きます。このウィンドウに表示されたシステムやインスタンスを展開すると、DB2 UDB は内部アクションを生成してシステム、インスタンス、およびデータベースの情報を抽出して、ツリーにデータを追加します。そのような内部アクティビティー中に DB2 UDB がバージョン 7 サーバーを検出すると、警告とダンプ・ファイルを生成します。

DB2 UDB から起動される 2 つのバージョンの SQL Assist

バージョン 7 とバージョン 8 のどちらの SQL Assist でも、DB2 Universal Database バージョン 8.1 から呼び出すことができます。バージョン 7 は、DB2 データウェアハウス・センターから開始することができます。その他のすべてのセンターは、最新のバージョン 8 を開始します。製品のオンライン・ヘルプには、バージョン 7 の SQL Assist についての追加情報があります。

Unicode サーバー動作の変更

バージョン 7 では Unicode サーバーは、接続時にアプリケーションから送られてきた GRAPHIC コード・ページを無視し、 UCS2 Unicode (コード・ページ 1200) が使用されるものとみなしました。バージョン 8 Unicode サーバーでは、クライアントによって送信されたコード・ページを使用します。

クラシック・コネクトは使用不可

クラシック・コネクト製品は、使用できません。データウェアハウスのドキュメンテーションやその他の場所で、クラシック・コネクト製品が参照されていることがありますが、もはや該当しないので無視してください。

製品の互換性

2 Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In

2 Microsoft Visual Studio .NET 用の IBM DB2 Development Add-In は、以下の製品バージョンをサポートしていません。

- 2 • DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 バージョン 8
- 2 • DB2 Universal Database for iSeries バージョン 5.1 と 5.2

6 WebSphere Application Server による SQLJ プログラム内の SQL ステートメントの実行

6 バージョン 5.0.1 より前のバージョンの WebSphere Application Server を使用すると、
6 SQLJ プログラムがカスタマイズされていなくても、SQLJ プログラム内のすべての
6 SQL ステートメントは動的に実行されます。

6 WebSphere Application Server 5.0.1 以降では、SQLJ プログラムをカスタマイズした場
6 合には、SQL ステートメントは静的に実行されます。

1 Microsoft Visual Studio、Visual C++

1 DB2 デベロップメント・センターのオンライン・ヘルプには「Build not successful:
1 -1」エラーの場合にとりうる解決策が記載されていますが、Microsoft Visual Studio
1 Visual C++ バージョン 5.0 は、SQL ストアード・プロシージャの開発用にはサポート
1 されません。ただし、Microsoft Visual Studio Visual C++ バージョン 6.0 はサポート
1 されます。追加の構成情報は、「IBM DB2 アプリケーション開発ガイド: アプリケーシ
1 ョンの構築および実行」に記載されています。

64 ビット・オペレーティング・システムで必要な Microsoft XP のフィックス

DB2 ファミリー製品で NETBIOS プロトコルを使用するように構成されている Microsoft XP オペレーティング・システム (2600) を使用している場合、Microsoft からホット・フィックスを入手する必要があります。 Knowledge Base アーティクル番号 Q317437 について、Microsoft に問い合わせてください。

Windows 64 ビット・オペレーティング・システム上の CLI および ODBC

ODBC と DB2 CLI の混在したアプリケーションを Windows 64 ビット・オペレーティング・システムで使用することはできません。

サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成

下表は、サポートされている LDAP クライアント構成と LDAP サーバー構成を要約しています。

表 1. サポートされている LDAP クライアントおよびサーバーの構成

	IBM SecureWay Directory	Microsoft Active Directory	Netscape LDAP サーバー
IBM LDAP クライアント	サポート対象	サポート対象	サポート対象
Microsoft LDAP/ADSI クライアント	サポート対象	サポート対象	サポート対象

IBM SecureWay Directory バージョン 3.1 は、LDAP バージョン 3 サーバーです。これは、Windows NT、Windows 2000、Windows 2003、および AIX オペレーティング・システムでと、Solaris オペレーティング環境で利用することができます。SecureWay Directory は、OS/390 Security Server と共に、AIX および iSeries (AS/400) 上の基本オペレーティング・システムに付属しています。

DB2 UDB は、AIX、Solaris、Windows 98、Windows XP、Windows NT、Windows 2000、および Windows 2003 で IBM LDAP クライアントをサポートしています。

DB2 UDB は、Linux IA32 および Linux/390 上の IBM LDAP バージョン 3.2.2 をサポートします。

Microsoft Active Directory は LDAP バージョン 3 サーバーです。Windows 2000 Server オペレーティング・システムの一部として使用できます。

Microsoft LDAP クライアントは、Windows オペレーティング・システムに組み込まれています。

4 Windows オペレーティング・システムで実行された場合の DB2 UDB は、 IBM
4 SecureWay Directory Server へのアクセス手段として、 IBM LDAP クライアントまたは
4 Microsoft LDAP クライアントの使用をサポートします。 IBM LDAP クライアントを明
4 示的に選択するには、 **db2set** コマンドを使用して DB2LDAP_CLIENT_PROVIDER レ
4 ジストリー変数を IBM に設定します。

Windows XP オペレーティング・システム

2 Windows XP Home Edition オペレーティング・システムは、 Personal Edition 製品での
2 みサポートされています。

以下の製品は、 Windows XP Professional オペレーティング・システムをサポートしてい
ます。

- 2 • Personal Edition
- 2 • Workgroup Server Edition
- 5 • DB2 Connect Personal Edition
- 5 • DB2 Connect Enterprise Edition

5 **注:** DB2 Connect Enterprise Edition は、開発またはテスト目的でのみ Windows XP
5 でサポートされます。実稼働環境には Windows 2000 または Windows Server
5 2003 が必要です。

コード化文字セット ID (CCSID) 5039 用の代替 Unicode 変換表

6 Microsoft Windows の日本語シフト JIS コード・ページは、 IBM コード化文字セット
6 ID (CCSID) 943 として登録されています。ただし、HP-UX プラットフォーム上ではシ
6 フト JIS コード・ページは CCSID 5039 として登録されています。CCSID 5039 の中
6 には、日本工業規格 (JIS) の文字だけが入っていて、ベンダー定義の文字はありませ
6 せん。CCSID 5039 の DB2 UDB データベースを HP-UX 上で使用してシフト JIS 文字
6 を保管することはできませんが、CCSID 5039 と CCSID 943 の間でコード・ページの変
6 換が行われます。Microsoft ODBC アプリケーションの使用時に、CCSID 5039 のデー
6 タを Unicode に変換すると、IBM のコード・ページの変換表と Microsoft のコード・
6 ページの変換表の相違のために問題が生じる可能性があります。

6 以下の文字のリストは、CCSID 5039 から Unicode に変換したときに、どちらの変換表
6 (IBM または Microsoft) を使用するかによって違ったコード・ポイントになります。こ
6 のような文字の場合、IBM の変換表は日本工業規格 JISX0208 および JISX0221 に準拠
6 しています。

6 表 2. CCSID 5039 から Unicode コード・ポイントへの変換

シフト JIS コード・ポイン ト (文字名)	IBM 基本コード・ポイント (Unicode 名)	Microsoft 基本コード・ポ イント (Unicode 名)
X'815C' (ダッシュ (全角))	U+2014 (ダッシュ (全角))	U+2015 (Horizontal bar)

表 2. CCSID 5039 から Unicode コード・ポイントへの変換 (続き)

シフト JIS コード・ポイント (文字名)	IBM 基本コード・ポイント (Unicode 名)	Microsoft 基本コード・ポイント (Unicode 名)
X'8160' (波形ダッシュ)	U+301C (波ダッシュ)	U+FF5E (Fullwidth tilde)
X'8161' (双柱)	U+2016 (双柱)	U+2225 (Parallel to)
X'817C' (負符号)	U+2212 (負符号)	U+FF0D (Fullwidth hyphen-minus)

たとえば、X'815C' の CCSID 5039 コード・ポイントをもつ文字ダッシュ (全角) は、IBM 変換表を使用すると Unicode コード・ポイント U+2014 に変換されますが、Microsoft 変換表を使用すると U+2015 に変換されます。すなわち、Microsoft ODBC アプリケーションは、U+2014 を無効コード・ポイントとして扱うことが原因の問題を生じる可能性があります。このような問題が起きないようにするために、デフォルトの IBM 変換表以外に、CCSID 5039 から Unicode への代替の Microsoft 変換表が DB2 UDB には用意されています。デフォルトの IBM 変換表を、代替の Microsoft 変換表に置き換える必要があります。Unicode から CCSID 5039 へのデフォルトの IBM 変換表は、Microsoft 版のものと一致することに注意してください。

コード化文字セット (CCSID) 5039 の Unicode 変換表から Microsoft 変換表への置換

CCSID 5039 から Unicode への変換では、DB2 UDB のデフォルトのコード・ページ変換表が使われます。Microsoft バージョンなど、異なるバージョンの変換表を使用したい場合は、デフォルトの変換表 (.cnv) ファイルを手動で置換する必要があります。

前提条件:

sqllib/conv ディレクトリー内の既存のコード・ページ変換表ファイルを置換する前に、それを変更前の状態に戻す場合に備えて、ファイルのバックアップをとる必要があります。UNIX および Linux では、sqllib/conv ディレクトリーは DB2 UDB のインストール・パスにリンクされています。

制約事項:

これを有効にするには、同じデータベースに接続するすべての DB2 クライアントで変換表を変更する必要があります。変更しないと、クライアントごとにそれぞれ異なるコード・ポイントを使用して同じ文字を保管する可能性があります。

手順:

CCSID 5039 から Unicode への変換用のデフォルトの DB2 UDB 変換表を置き換えるには、次のステップを行います。

1. sqllib/conv/ms/5039ucs.cnv を sqllib/conv/5039ucs2.cnv にコピーします。

6

2. DB2 UDB を再始動します。

6

コード化文字セット ID (CCSID) 954 用の代替 Unicode 変換表

6

6

6

6

6

6

6

6

6

日本語 EUC コード・ページ用の IBM コード化文字セット ID (CCSID) は、CCSID 954 として登録されています。CCSID 954 は、日本語の UNIX および Linux プラットフォームの共通のエンコード方式です。Microsoft ODBC アプリケーションを使って CCSID 954 の DB2 UDB データベースに接続すると、CCSID 954 から Unicode へのデータの変換時に問題が生じることがあります。問題が生じる可能性は、IBM のコード・ページの変換表と Microsoft のコード・ページの変換表の相違に起因します。IBM の変換表は日本工業規格 JISX0208、JISX0212、および JISX0221 に指定されている文字名に準拠しています。

6

6

以下の文字は、CCSID 954 から Unicode に変換したときに、IBM または Microsoft のどちらの変換表を使用するかによって違ったコード・ポイントになります。

6

表 3. CCSID 954 から Unicode コード・ポイントへの変換

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

EUC-JP コード・ポイント (文字名)	IBM 基本コード・ポイント (Unicode 名)	Microsoft 基本コード・ポイント (Unicode 名)
X'A1BD' (ダッシュ (全角))	U+2014 (ダッシュ (全角))	U+2015 (Horizontal Bar)
X'A1C1' (波ダッシュ)	U+301C (波ダッシュ)	U+FF5E (Fullwidth Tilde)
X'A1C2' (双柱)	U+2016 (双柱)	U+2225 (Parallel To)
X'A1DD' (負符号)	U+2212 (負符号)	U+FF0D (Fullwidth hyphen-minus)
X'8FA2C3' (破断線)	U+00A6 (破断線)	U+FFE4 (Fullwidth broken bar)

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

6

たとえば、X'A1BD' の CCSID 954 コード・ポイントをもつ文字ダッシュ (全角) は、IBM 変換表を使用すると Unicode コード・ポイント U+2014 に変換されますが、Microsoft 変換表を使用すると U+2015 に変換されます。変換マッピングのこの相違のため、DB2 UDB Unicode データベースにおいてや、DB2 UDB 954 データベースの GRAPHIC 列においては、同一文字に対して 2 つの別々のコード・ポイントが充当されることがあります。すなわち、Microsoft ODBC アプリケーションは、U+2014 を無効コード・ポイントとして扱うことが原因の問題を生じる可能性があります。このような問題が起きないようにするために、デフォルトの IBM 変換表以外に、CCSID 954 から Unicode への代わりに Microsoft 変換表が DB2 UDB には用意されています。デフォルトの IBM 変換表を、代わりに Microsoft 変換表に置き換える必要があります。Unicode から CCSID 954 へのデフォルトの IBM 変換表は、Microsoft 版のものと一致することに注意してください。

コード化文字セット (CCSID) 954 の Unicode 変換表から Microsoft 変換表への置換

CCSID 954 から Unicode への変換では、DB2 UDB のデフォルトのコード・ページ変換表が使われます。Microsoft バージョンなど、異なるバージョンの変換表を使用した場合は、デフォルトの変換表 (.cnv) ファイルを手動で置換する必要があります。

前提条件:

sqllib/conv ディレクトリー内の既存のコード・ページ変換表ファイルを置換する前に、それを変更前の状態に戻す場合に備えて、ファイルのバックアップをとる必要があります。UNIX および Linux では、sqllib/conv ディレクトリーは DB2 UDB のインストール・パスにリンクされています。

制約事項:

これを有効化するには、同じ CCSID 954 データベースに接続するすべての DB2 クライアントで変換表を変更する必要があります。クライアントが日本語 Windows の場合に、その ANSI コード・ページがシフト JIS (CCSID 943) であれば、CCSID 943 と Unicode の間の DB2 のデフォルトの変換表を Microsoft バージョンのものに変更する必要もあります。変更しないと、クライアントごとにそれぞれ異なるコード・ポイントを使用して同じ文字を保管する可能性があります。

手順:

CCSID 954 から Unicode への変換用のデフォルトの DB2 UDB 変換表を置き換えるには、次のステップを行います。

1. sqllib/conv/ms/0954ucs2.cnv を sqllib/conv/0954ucs2.cnv にコピーします。
2. DB2 UDB を再始動します。

CCSID 943 と Unicode の間の変換用のデフォルトの DB2 UDB 変換表を置き換えるには、次のステップを行います。

1. sqllib/conv/ms/0943ucs2.cnv を sqllib/conv/0943ucs2.cnv にコピーします。
2. sqllib/conv/ms/ucs20943.cnv を sqllib/conv/ucs20943.cnv にコピーします。
3. DB2 UDB を再始動します。

MVS オペレーティング・システムの非サポート

ドキュメンテーションには書かれていますが、MVS™ オペレーティング・システムはすでに DB2 Universal Database ではサポートされていません。MVS は z/OS に代わりました。

DB2 UDB for AIX 4.3.3 および 5.1 以上での AIX C++ バージョン 6 のランタイムの必要性

DB2 UDB Version 8.1.4 for AIX 以降および DB2 UDB Versions 4.3.3 for AIX と DB2 UDB Versions 5.1 for AIX 以降を使用する場合には、AIX C++ バージョン 6 のランタイム・ライブラリーが、ご使用の AIX システム上にインストールされている必要があります。以下の Web サイトから 2003 年 3 月付けの C++ ランタイム PTF 更新をダウンロードしてください。

http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=0&q=x1C.rte&uid=swg24004427&loc=en_US&cs=utf-8&cc=us&lang=en

DB2 バージョン 8.1.4 以上を使用する前に、上記のサイトに記載されているインストールの説明に従ってください。

Java 共用ライブラリーへのアクセス (Linux)

Java ストアード・プロシージャーまたはユーザー定義関数を実行するには、Linux ランタイム・リンカーが特定の Java 共用ライブラリーにアクセスできる必要があります。また、DB2 UDB がこのライブラリーと Java 仮想マシンの両方をロードする必要があります。このロードを実行するプログラムは `setuid` 権限で実行されるため、`/usr/lib` ディレクトリー内の従属ライブラリーのみが検索されます。

注: このトピックは、リンクする必要のある基本的な共用ライブラリーについて述べています。作成して実行するアプリケーションによっては、さらに別の共用ライブラリーにリンクする必要がある場合もあります。

Java 共用ライブラリーを指すシンボリック・リンクを `/usr/lib` ディレクトリー内に作成します。

IBM Developer Kit 1.3 では、`libjava.so`、`libjvm.so`、および `libhpi.so` へのシンボリック・リンクが必要です。シンボリック・リンクを作成するには、`root` として次のコマンドを実行します。

```
cd /usr/lib
ln -fs JAVAHOME/jre/bin/libjava.so .
ln -fs JAVAHOME/jre/bin/classic/libjvm.so .
ln -fs JAVAHOME/jre/bin/libhpi.so .
```

ここで、`JAVAHOME` は SDK のベース・ディレクトリーを示します。DB2 UDB がこのライブラリーを検出できない場合に、Java ルーチンを実行しようとするとき、-4301 エラーが通知されて、ライブラリーが検出できなかったことを示すメッセージが管理通知ログに記録されます。

注: これに代わる方法では、`/usr/lib` ディレクトリー内にリンクを作成しないで、Java 共用ライブラリーを `/etc/ld.so.conf` ファイルに追加します。この方法をとる場合、`/etc/ld.so.conf` ファイルの変更後に `root` として `ldconfig` コマンドを実

6 行する必要があります。このようにしないと、ルーチンの呼び出しが完了しないの
6 で、処理は成功しません。一部のケースでは、この代替方法がやはり成功しない
6 で、ルーチンが完了しないことがあります。代替方法が成功しない場合、上記の解
6 説どおり、 /usr/lib ディレクトリー内にリンクを作成してください。

5 バックアップおよびリストア (Linux 390)

Linux 390 オペレーティング・システムの使用時には、複数の磁気テープ装置が関わる
バックアップおよびリストア操作は成功しない可能性があります。

ERwin 4.x メタデータ・ブリッジ

ERwin 4.0 メタデータを Linux オペレーティング・システムにインポートすることはで
きません。

Windows 98 および WinME では、以下の制限付きで ERwin 4.x ブリッジがサポート
されています。

- DB2 コマンド行プロセッサからのみ **db2erwinimport** コマンドを実行できる。
- -x および -t パラメーターでは XML およびトレース・ファイルの名前を完全修飾す
る必要がある。

2 Hummingbird Exceed を使ったデベロップメント・センターへのアクセス時 2 のビュー連結の使用可能化

2 Hummingbird Exceed を使用して UNIX® 上のデベロップメント・センターにアクセス
2 する場合に、デベロップメント・センター内のタイトル・バーのドラッグによってビュー
2 の移動と連結を行えるようにするには、先に XTEST 拡張機能バージョン 2.2 を使用
2 可能にしておく必要があります。

2 XTEST 拡張機能を使用可能にするには、次のようにします。

- 2 1. 「スタート」メニューで「プログラム」->「Hummingbird Connectivity
2 7.0」->「Exceed」->「XConfig」を選択します。「XConfig」ウィンドウが開きま
2 す。
- 2 2. オプション: パスワードの必要な構成の場合、XConfig パスワードを入力します。
- 2 3. 「プロトコル」アイコンをダブルクリックします。「プロトコル」ウィンドウが開き
2 ます。
- 2 4. 「X 規格合致試験の互換性 (X Conformance Test Compatibility)」チェック・ボ
2 ックスを選択します。
- 2 5. 「プロトコル」ウィンドウ内の「拡張機能... (Extensions...)」ボタンをクリックし
2 ます。「プロトコル拡張機能 (Protocol Extensions)」ウィンドウが開きます。
- 2 6. 「拡張機能の使用可能化 (Enable Extensions)」リストで、「XTEST(X11R6)」チェッ
2 ク・ボックスを選択します。
- 2 7. 「OK」をクリックします。

インストール、移行、アップグレード、構成に関する情報

インストールに関する情報

3 DB2 UDB のインストール (AIX)

3 空白の入ったパスのディレクトリーから db2setup プログラムを実行すると、セットア
3 ップは失敗して、次のエラーが表示されます。

3 <file>: not found

3 空白の入っていないパスのディレクトリーにインストール可能なイメージを入れてくだ
3 さい。

2 DB2 UDB のインストール (Linux)

2 バージョン 8.1 の DB2 Universal Database を Linux にインストールすると、RPM ベ
2 ースのインストールでは IBM Java RPM (IBMJava2-SDK-1.3.1.-2.0.i386.rpm) のインスト
2 ールが試みられます。より新しいレベルの RPM (IBMJava2-SDK-1.4.0.-2.0.i386.rpm な
2 ど) がすでに存在すると、バックレベルの RPM はインストールされません。

2 ただしそのような場合でも、Java 1.3 パスの /opt/IBMJava2-13/ を指す JDK_PATH デ
2 ータベース構成パラメーターはそのままになります。というわけで、DB2 ツール・カタ
2 ログのインストールなどの、Java に依存する機能はいずれも作動しなくなります。

2 この問題を解決するには、インスタンス所有者として次のようなコマンドを実行しま
2 す。

2 db2 update dbm cfg using JDK_PATH /opt/IBMJava2-14

2 このコマンドは、DB2 Universal Database に正しい IBM Developer Kit を指示します。

5 さらに別のアジア言語のフォントのインストール (Linux)

5 アジア言語文字用に追加された 2 バイト文字セット (DBCS) サポートを組み込んだ
5 Linux 用の追加フォント・パッケージが IBM から提供されています。そのようなフォ
5 ント・パッケージが必要になるのは、国別または地域別の文字を表示するのに必要なフ
5 ントだけをインストールする一部のバージョンの Linux においてです。

5 **db2setup** コマンドを実行したときに、DB2 セットアップ・ウィザード・インターフェ
5 ースに文字の欠落を見つけた場合は、すべての必要なフォントがご利用の Linux システ
5 ムにインストールされていない可能性があります。インストール CD に埋め込まれてい
5 るフォントを正しく参照するように **db2setup** コマンドを使用可能にするには、以下の
5 タスクを実行します。

- 5 1. 次のコマンドを入力します。
- 5 `export JAVA_FONTS=/<cdrom>/db2/<linux_platform>/java/jre/lib/fonts`
- 3 <cdrom> はインストール・イメージの場所、 <linux_platform> は *Linux* で始まるデ
- 3 イレクトリー名を示します。
- 5 2. **db2setup** コマンドを再実行します。

5 インストール後、DB2 GUI ツールの使用中に文字の欠落に気付いた場合は、DB2 製品

5 に付属している必要フォントをインストールしてください。そのようなフォントは、以

5 下のいずれかの CD の `fonts` ディレクトリーにあります。

- 5 • *IBM Developer Kit, Java Technology Edition, Version 1.3.1 for AIX operating systems on 64-bit systems*
- 5 • *Java application development and Web administration tools supplement for DB2, Version 8.1.*

5 このディレクトリーでは、Times New Roman WorldType および Monotype Sans

5 Duospace WorldType の 2種類の書体を選択できます。各書体には、各国または地域特有

5 のフォントがあります。次の表に、`fonts` ディレクトリーに圧縮フォーマットで収めら

5 れている 8 種類のフォントをリストします。

5 表 4. 追加のアジア言語のフォントのファイル名

フォント書体	フォント・ファイル名	国/地域
Times New Roman WT J	tnrwt_j.zip	日本およびその他の国/地域
Times New Roman WT K	tnrwt_k.zip	韓国
Times New Roman WT SC	tnrwt_s.zip	中国 (簡体字)
Times New Roman WT TC	tnrwt_t.zip	台湾 (繁体字)
Monotype Sans Duospace WT J	mtsansdj.zip	日本およびその他の国/地域
Monotype Sans Duospace WT K	mtsansdk.zip	韓国
Monotype Sans Duospace WT SC	mtsansds.zip	中国 (簡体字)
Monotype Sans Duospace WT TC	mtsansdt.zip	台湾 (繁体字)

5 注: これらのフォントは、システム・フォントを置き換えません。これらのフォント

5 は、DB2 Universal Database と共に、または DB2 Universal Database を使用するた

5 めに使用されます。これらのフォントの一般または無制限の販売、または配布を行

5 うことはできません。

5 フォントをインストールするには、次のようにします。

- 5 1. フォント・パッケージを `unzip` します。
- 5 2. フォント・パッケージを `/opt/IBMJava2-131/jre/lib/fonts` ディレクトリーにコピー
5 ーします。このディレクトリーがない場合は、作成してください。
- 5 3. 次のコマンドを入力します。

```
5 export JAVA_FONTS=/opt/IBMJava2-131/jre/lib/fonts
```

5 最低でも、国または地域用のフォントを書体ごとに 1 つインストールする必要があります。中国、韓国、または台湾にお住まいの場合は、各国特有または地域特有のバージョンを使用してください。それ以外の方は、日本語バージョンのフォントを使用してください。システムにスペースがある場合には、8 種類のフォントをすべてインストールしてください。

6 **db2setup コマンドを使った製品の追加に対する制約事項**

6 DB2 製品のインストールが完了したら、さらに別の DB2 製品を追加することができます。**db2setup** コマンドを使って製品を追加する場合、次のような推奨事項と制約事項
6 が適用されます。

6 **推奨事項:**

6 インストール済みの製品と追加しようとしている製品は同じコード・レベルになければ
6 なりません。たとえば、DB2 ESE サーバーのバージョン 8 フィックスパック 5 がすでに
6 インストール済みの場合に、DB2 Information Integrator 製品を追加しようとして
6 いるとします。この場合、DB2 Information Integrator も、バージョン 8 フィックスパ
6 ック 5 でなければなりません。

6 **制約事項:**

- 6 • DB2 のフィックスパック・レベルのほうが、追加しようとしている製品のフィックス
6 パック・レベルよりも高い場合、この組み合わせは可能です。ただし、追加しよう
6 としている製品のフィックスパック・レベルは DB2 のフィックスパック・レベルより
6 も低いので、その追加製品のインストール後に DB2 フィックスパック・レベルをも
6 う一度適用する必要があります。フィックスパックの再適用に関する解説は、該当す
6 するフィックスパックの README を参照してください。
- 6 • DB2 のフィックスパック・レベルのほうが、追加しようとしている製品のフィックス
6 パック・レベルよりも低い場合、エラーが生じます。追加しようとしている製品のほ
6 うが、DB2 よりも高いフィックスパック・レベルであってはなりません。この場合、
6 まず DB2 を適当なレベルに下げてから、追加製品をインストールしなければなりま
6 せん。詳細は、該当するフィックスパックの README を参照してください。

以下の表は db2setup の組み合わせを示しています。

表 5. db2setup の組み合わせ

DB2 フィックスパック・レベル	追加製品のフィックスパック・レベル	組み合わせが許可されるかどうか
バージョン 8 フィックスパック 3	バージョン 8 フィックスパック 3	Yes。推奨の組み合わせです。
バージョン 8 フィックスパック 3	バージョン 8 GA	Yes。ただし、バージョン 8 フィックスパック 3 を適用しなおす必要があります。フィックスパックの再適用に関する解説は、DB2 サポートの Web サイトにアクセスして、該当するフィックスパックの README を参照してください。
バージョン 8 フィックスパック 3	バージョン 8 フィックスパック 5	No。まず、DB2 のフィックスパック・レベルを上げて (この例ではバージョン 8 フィックスパック 5) から、追加製品をインストールしてください。必須のバージョン 8 のフィックスパックのインストールに関する解説は、DB2 サポートの Web サイトにアクセスして、該当するフィックスパックの README を参照してください。

DB2 サポートの Web サイトのアドレスは <http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> です。

Spatial Extender フィックスパックのダウンロードと解凍

DB2 Version 8 for Windows フィックスパック 3 以降では、1 つの汎用フィックスパックではなく、製品別のフィックスパックが用意されています。この変更によって影響を受けるのは、Windows プラットフォーム上の DB2 バージョン 8 製品のみです。

DB2 バージョン 8 と DB2 Spatial Extender for Windows を同じシステムにインストールする場合、DB2 フィックスパック・イメージと Spatial Extender フィックスパック・イメージをダウンロードしてから、それぞれのイメージを共通の親ディレクトリ内に解凍しなければなりません。GUI インストールまたはサイレント・インストールを引き続き行うには、イメージをすべて解凍する必要があります。

フィックスパックのインストールの詳細は、DB2 バージョン 8 フィックスパック 6 の README を参照してください。

6 **フィックスパックの適用後の Query Patroller パッケージのバインディング**

6 フィックスパックを適用してからフィックスパック・インストール後のタスクをすべて
6 実行した後、 Query Patroller をインストールし終わったら、以下のステップを行います。
6

6 1. DBADM 権限をもつユーザーとしてログインします。

6 2. 次のような正しいディレクトリーに変更します。

- 6 • INSTPATH/bnd (Linux および UNIX)
- 6 • INSTPATH\bnd (Windows)

6 ただし INSTPATH は、DB2 UDB インスタンスのパスです。

6 3. 以下のコマンドを実行します。

```
6 db2 connect to dbname  
6 db2 bind @qpserver.lst blocking all grant public
```

6 **フィックスパック 3 レベル以上の Query Patroller のインストール**

6 Query Patroller は、DB2 UDB データベースに対する照会の流れを制御するのに使用さ
6 れる照会管理システムです。 DB2 UDB バージョン 8.1.2 より、DB2 Query Patroller
6 はスタンドアロン製品になりました。これは DB2 Warehouse Manager のコンポーネン
6 トではありません。

6 DB2 バージョン 8 フィックスパック 3 以上をインストール済みであって、基本バー
6 ジョンまたは GA バージョンの DB2 Query Patroller をインストールする場合、 DB2
6 UDB フィックスパック 3 以上を再適用する必要があります。再適用しないと、Query
6 Patroller の変更内容は、現在の DB2 UDB フィックスパック・レベルには適用されませ
6 ん。

6 Query Patroller サーバーをインストールする場合、 DB2 UDB フィックスパック・レベ
6 ルを再適用した後、DB2 インスタンスも更新する必要があります。インスタンスは、更
6 新後に再始動しなければなりません。

DB2 Web ツール

以下の言語では、DB2 Web ツールでサポートされるアプリケーション・サーバーは、
サブレット 2.3 仕様に準拠している必要があります。

- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)
- ロシア語
- ポーランド語

インストール時のオプションではない言語の DB2 インフォメーション・センターのインストール

DB2 のセットアップ・ウィザードでは、DB2 製品のインストール用の言語の DB2 HTML ドキュメンテーションだけをインストールすることができます。よって、以下の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを使って DB2 HTML ドキュメンテーションをインストールすることはできません。

- ポルトガル語 (UNIX の場合のみの制約事項)
- デンマーク語、フィンランド語、ノルウェー語、スウェーデン語 (Linux の場合のみの制約事項)
- オランダ語、トルコ語 (HP-UX、Solaris、Linux のみの場合の制約事項)
- アラビア語 (UNIX の場合のみの制約事項)

上記の言語で DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、次のようにします。

1. *DB2 HTML ドキュメンテーション CD* を CD ドライブに挿入します。
2. 以下のディレクトリをご使用のコンピューターにコピーします。
 - `/cdrom/program files/IBM/SQLLIB/doc/htmlcd/language`

cdrom は CD をマウントしたロケーション、*language* は使用する言語のコードです。

フォルダーはどこに置いてもかまいません。DB2 HTML ドキュメンテーションは、CD から直接表示することもできます。この方法については、DB2 バージョン 8 マニュアルの付録の『DB2 HTML ドキュメンテーション CD から直接オンライン技術情報を表示』のトピックを参照してください。

注:

1. ドキュメンテーションを表示するには、Microsoft Internet Explorer 5.0 以上、または Netscape 6.1 以上のブラウザを使用する必要があります。
2. 同様に、ドキュメンテーションを製品から立ち上げると、手動でコピーしたドキュメンテーションではなく、製品のインストールの一環としてインストールされたドキュメンテーションが表示されます。

DB2 Universal Database バージョン 8 HTML ドキュメンテーション・インストールの制約事項 (Windows)

Windows では、DB2 Universal Database バージョン 7 (またはそれ以前のバージョン) がインストール済みのワークステーションまたはサーバーには、DB2 Universal Database バージョン 8 の HTML ドキュメンテーションをインストールしないでください。インストーラーが以前のバージョンを検出し、以前の製品を除去します。

各国語バージョンの DB2 UDB 用の MDAC ファイルのインストール

各国語バージョンの DB2 バージョン 8.1 をインストールする前に、各国語バージョンの Microsoft Data Access コンポーネント (MDAC) 2.7 をインストールしないと、DB2 Universal Database は英語の MDAC ファイルをデフォルトでインストールします。これによって、オペレーティング・システムが英語版でない場合、「Windows ODBC Data Source Administrator」パネルは未翻訳のまま表示されることになります。この問題を解決するには、「MDAC 2.7 RTM - Refresh」バンドルを、Microsoft の Web サイト <http://msdn.microsoft.com/data/downloads/updates/default.aspx> からインストールします。インストールしたい言語を選択して、必要な実行ファイルをダウンロードして実行します。これで、翻訳版の ODBC データ ソース アドミニストレータ・ファイルがインストールされます。

移行に関する情報

1 DataJoiner またはレプリケーション使用時の DB2 Universal Database の移行

1 DB2 Universal Database レプリケーション用のキャプチャーまたはアプライ・プログラム
1 を実行している DataJoiner[®] または DB2 Universal Database for Linux, UNIX and
1 Windows のインスタンスを移行する場合は、DB2 Universal Database または
1 DataJoiner インスタンスを移行する前に、レプリケーション環境の移行の準備を行う
1 必要があります。必要な準備を行うための詳細な方法は、DB2 DataPropagator[™] バージ
1 ョン 8 の移行に関するドキュメンテーションに記載されています。DB2 DataPropagator
1 バージョン 8 の移行に関するドキュメンテーションは、
1 <http://www.ibm.com/software/data/dpropr/> に掲載されています。

5 DB2 バージョン 8 の Windows 32 ビットのデータベースから Windows 64 5 ビットへの移行

5 このトピックでは、32 ビット・コンピューター上の 32 ビット DB2 バージョン 8 デ
5 ータベースを 64 ビットの Windows オペレーティング・システム上の 64 ビットのデ
5 ータベースに移行するステップを示します。

5 前提条件:

- 5 • ご使用の 64 ビット・コンピューターに、DB2 バージョン 8 の 64 ビット・バー
5 ジョンがインストールされている必要があります。
- 5 • ご使用の 32 ビット Windows システムで DB2 バージョン 8 が実行されていること
5 を確認してください。

5 手順:

5 Windows 64 ビット DB2 バージョン 8 に移行するには、次のようにします。

- 5 1. ご使用の 32 ビット Windows システムで DB2 バージョン 8 データベースのバック
5 アップを作成します。
- 5 2. DB2 バージョン 8 バックアップ (上記の手順 1 で作成したもの) を 64 ビット
5 Windows システムにリストアします。

5 **注:** 32 ビット・システムから 64 ビット・システムへの DB2 UDB の移行に加えて、
5 次のような移行を行うこともできます。

- 5 • Windows の複数のバージョン間での移行
- 5 • DB2 UDB の複数のバージョン間での移行
- 5 • すべての一斉移行
- 5 • 32 ビットへの逆行移行

5 詳細な情報が IBM レッドブック「Scaling DB2 UDB on Windows Server 2003」に
5 記載されています。このレッドブックには、次の URL からアクセスできます。

5 <http://publib-b.boulder.ibm.com/Redbooks.nsf/RedbookAbstracts/sg247019.html>

2 旧バージョンからの XML Extender の移行

2 旧バージョンの DB2 XML エクステンダーを使用している場合に、更新後の XML
2 Extender リリースを備えた既存の XML 対応のデータベースを使用するには、XML
2 Extender に対応する各データベースをあらかじめ移行しておく必要があります。新規の
2 どのフィックスパックにも、これまでのフィックスパックの更新内容が入っています。

2 XML 対応のデータベースと XML 対応の列を移行するには、次のようなステップを行
2 います。

- 2 1. DB2 コマンド行から、次のように入力します。

```
2 db2 connect to database_name  
2 db2 bind dxxinstall/bnd/@dxxMigv.lst  
2 db2 bind dxxinstall/bnd/@dxxbind.lst
```

2 *dxxinstall* は、DB2 Universal Database のインストール先のディレクトリー・パスで
2 す。

- 2 2. DB2 コマンド行から、次のように入力します。

```
2 dxxMigv database_name
```

4 データベースの移行 (HP-UX on IA64)

4 DB2 UDB for HP-UX on IA64 のデータベース移行は、どのバージョン 8.x リリースで
4 もサポートされません。

4 DB2 UDB for HP-UX on IA64 では、バージョン 7 DB2 バックアップ・イメージから
4 バージョン 8 インスタンスへの復元はサポートされていません。

既知の制限、問題および予備手段

以下に、DB2® Universal Database バージョン 8.1 フィックスパック 6 の現在知られている制限、問題、および予備手段を示します。この項の情報は、DB2 Universal Database™ のバージョン 8.1 フィックスパック 6 リリースと、そのサポート対象製品にのみ該当します。制限および制約事項は、他のリリースの製品に該当することもしないこともあります。

制限事項

64 ビット・オペレーティング・システムでのデベロップメント・センターの制約事項

6 64 ビット・サーバーに対する Java ストアード・プロシージャのデバッグは、デベロ
6 ップメント・センターではサポートされていません。SQL ストアード・プロシージャ
のデバッグは、64 ビットの Windows オペレーティング・システムでサポートされて
います。64 ビット・サーバーでは、OLE DB または XML ユーザー定義関数の開発
はサポートされません。

2 デベロップメント・センター (Linux)

2 2 いくつかの Linux ディストリビューション (32 ビット、64 ビット、Intel、zSeries、ま
2 2 たは iSeries) で実行される Java™ ストアード・プロシージャをデバッグするのにデ
2 2 ベロップメント・センターを使用することはできません。

4 二重引用符を使ったストアード・プロシージャのデバッグ

4 4 IBM DB2 Universal Database デベロップメント・センターでは、ストアード・プロシ
4 4 ジャー名、スキーマ、または特定の名前の中で二重引用符 (") を使ったストアード・プ
4 4 ロシージャのデバッグをサポートしていません。

デベロップメント・センターで Java ルーチンをコンパイルするのに必要なパスの設定

デベロップメント・センターは、デベロッパー・キットのバージョンのインストール先のロケーションを知らないかぎり、Java™ ルーチンをコンパイルできません。デベロッパー・キット・バージョンのデフォルト・ディレクトリーは、デベロップメント・センターが最初に開始されたときに、\$HOME/IBM/DB2DC/DB2DC.settings ファイルに書き込まれます。そのディレクトリーを \$USER.settings ファイルにコピーして、Unicode エディターで変更するか、あるいはデフォルト・ロケーションにあるデベロッパー・キットのディレクトリーへのシンボリック・リンクを作成することができます。

Java ストアード・プロシージャを同時に実行してデバッグする場合のデベロップメント・センターの制限事項

DB2 Universal Database デベロップメント・センターは、Java ストアード・プロシージャの実行とデバッグの同時処理をサポートしません。デベロップメント・センターでは、複数の Java ストアード・プロシージャを一度に実行したり、1 つの Java ストアード・プロシージャをデバッグしたりすることはできませんが、Java ストアード・プロシージャを実行しながら別の Java ストアード・プロシージャをデバッグすることはできません。デフォルトでは、SQL ストアード・プロシージャのデバッグに対して義務付けられているとおり、KEEPFENCED データベース・マネージャー構成キーワードは KEEPFENCED=YES と設定されています。キーワード KEEPFENCED のデフォルト値が YES であると、ルーチン・プロセスはアクティブのままになるので、JVM ポートの競合が発生します。デフォルトの KEEPFENCED=YES データベース・マネージャー構成設定が使われる以下のいずれの状況下でも、Java ストアード・プロシージャは、JVM 例外の原因になって、失敗することになります。

- デベロップメント・センター内で Java ストアード・プロシージャを作成してからデバッグした場合
- 一方のユーザーが Java ストアード・プロシージャを実行しているときに、もう一方のユーザーが、先の Java ストアード・プロシージャがまだ実行中のときに Java ストアード・プロシージャをデバッグした場合
- 一方のユーザーが Java ストアード・プロシージャをデバッグしているときに、もう一方のユーザーが、先の Java ストアード・プロシージャがまだデバッグ中のときに Java ストアード・プロシージャを実行した場合

この制限事項に対処するには、以下のコマンドを実行して、KEEPFENCED データベース・マネージャー構成キーワードを必ず KEEPFENCED=NO に設定するようにします。

```
db2 update dbm cfg using KEEPFENCED NO
db2stop
db2start
```

KEEPFENCED を NO に設定すると、Java ストアード・プロシージャの呼び出しが終了すると db2fmp プロセスがシャットダウンしてから、DB2 UDB が新規の db2fmp プロセスを開始して次のルーチン呼び出しを処理します。これによって、Java ストアード・プロシージャのデバッグを開始したときに、デバッグ・モードの JVM が存在することは確実になくなります。

KEEPFENCED=YES の設定が必要なのは、デバッグ用の SQL ストアード・プロシージャを作成するためと、SQL ストアード・プロシージャをデバッグするためです。KEEPFENCED=NO でも、SQL ストアード・プロシージャを作成して実行することはできますが、デバッグすることはできません。

DB2 UDB for z/OS または DB2 UDB for OS/390 サーバーでの LOB ロケータの使用

DB2 UDB for z/OS または DB2 UDB for OS/390 サーバー上の DB2 UDB 表上の DBCLOB 列にアクセスするのに LOB ロケータを使用する予定の場合、それぞれのサーバーで com.ibm.db2.jcc.DB2LobTableCreator ユーティリティを実行して、LOB ロケータのフェッチに必要な表を作成します。

DB2LobTableCreator の構文:

```
▶--java--java com.ibm.db2.jcc.DB2LobTableCreator-----▶
▶--url--jdbc:db2://server-----/database--user--user-ID-----▶
      |_____|
      |_____|:port
▶--password--password-----▶
      |_____|
      |_____|-help
```

DB2LobTableCreator オプションの説明:

-url

DB2LobTableCreator を実行するデータ・ソースを指定します。-url 値の変数部は次のとおりです。

jdbc:db2:

接続は、DB2 UDB ファミリー内のサーバーへのものであることを示します。

server

データベース・サーバーのドメイン・ネームまたは IP アドレス。

port

データベース・サーバーに割り当てられている TCP/IP サーバー・ポート番号。これは 0 から 65535 までの整数です。デフォルトは 446 です。

database

データベース・サーバーの名前。

database は、インストール中に定義された DB2 UDB ロケーションの名前です。この値の中の文字はすべて、大文字でなければなりません。サーバー上で以下の SQL ステートメントを実行すれば、ロケーション名を判別することができます。

```
SELECT CURRENT SERVER FROM SYSIBM.SYSDUMMY1;
```

-user

DB2LobTableCreator の実行に使用するユーザー ID を指定します。このユーザーは、DSNATPDB データベース内に表を作成する権限をもっていなければなりません。

-password

ユーザー ID のパスワードを指定します。

-help

サポートされるオプションを 1 つずつ DB2LobTableCreator ユーティリティで記述されることを指定します。他のオプションを -help 付きで指定しても、無視されます。

接続中のログイン成功レポート時の障害 (AIX)

AIX で OS 認証を使用すると、DB2 UDB は、接続中に成功した認証に基づいてログイン成功のレポートを試みます。バージョン 8 フィックスパック 5 より前のバージョンでは、DB2 UDB がログイン成功をレポートできなかった場合、ユーザーが認証済みであっても接続に失敗します。バージョン 8 フィックスパック 5 以降では、接続が引き続き認められて、障害は db2diag.log に記録されます。

JDBC ドライバーの制限事項 (HP-UX)

IBM DB2 の汎用 JDBC ドライバーは、HP のデフォルト文字セット roman8 で作成されたデータベースには接続できません。汎用 JDBC ドライバーを使用するすべての SQLJ および JDBC アプリケーションは、別の文字セットで作成されたデータベースに接続する必要があります。ご使用の LANG が "C" または "roman8" ロケールに設定されている場合、これに対応する ISO ロケールに変更する必要があります。例えば、ご使用の LANG が de_DE.roman8 に設定されている場合は、次のコマンドを実行して de_DE.iso88591 に変更してください。

```
export LANG=de_DE.iso88591
```

DB2 SQLJ および JDBC サンプル・プログラムを汎用 JDBC ドライバーで実行するには、次のコマンドを使用してサンプル・データベースを作成することができます (この例では、米国英語の ISO ロケールを使用)。

```
export LANG=en_US.iso88591
db2 terminate
db2samp1
```

注: サンプル・データベースがすでに存在している場合は、**db2samp1** コマンドを実行する前にドロップしておく必要があります。

バージョン 8 における SNA サポートの制限

以下のサポートは、DB2 Universal Database バージョン 8 Enterprise Server Edition (ESE) for Windows および UNIX ベース・オペレーティング・システムからと、DB2 Connect Enterprise Edition (CEE) Version 8 for Windows および UNIX オペレーティング・システムからは削除されました。

- SNA を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) 機能は使用できません。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) が必要なアプリケーションは、TCP/IP 接続を使用する必要があります。ホストまたは iSeries™ データベース・サーバーへの TCP/IP 接続を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) は、一部のリリースでは使用できます。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) が必要なホストま

たは iSeries アプリケーションでは、DB2 Universal Database ESE バージョン 8 内の TCP/IP マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) の新機能を使用できます。

- DB2 Universal Database ESE または DB2 CEE サーバーは、SNA を使用したクライアント接続をサポートしなくなりました。バージョン 8 フィックスバック 1 時点の DB2 Universal Database では、32 ビット・バージョンの AIX、Solaris™ オペレーティング環境、HP-UX、および Windows のアプリケーションは、SNA を使用してホストまたは iSeries のデータベース・サーバーにアクセスすることができます。アプリケーションはこのサポートを利用すれば、SNA を使用してホストまたは iSeries データベースにアクセスできますが、その際 1 フェーズ・コミットのみを使用することになります。
- DB2 Universal Database for z/OS™ でのシスプレックスのサポートは、TCP/IP を使用する場合のみ利用可能です。シスプレックスは、SNA を使用した接続ではサポートされません。
- ホスト・データベース・サーバーへの SNA 接続を使用した場合のパスワード変更サポートは利用できなくなりました。
- SNA はすべて、次のバージョンの DB2 Universal Database および DB2 Connect ではサポートされなくなります。

Linux でのツール・カタログ・データベース作成の非サポート (Linux AMD64)

Linux (AMD64) での 64 ビットの DB2 UDB インスタンスのもとのツール・カタログ・データベースの作成はサポートされません。以下の方法のいずれかを使って、64 ビット・インスタンスのもとのツール・カタログを作成しないでください。

- DB2 UDB をインストールする。
- **db2isetup** コマンドを使って 64 ビット・インスタンスを更新する。
- インストールの完了後に **CREATE TOOLS CATALOG CLP** コマンドを発行する。

バージョン 8.1.4 時点では、Linux (AMD64) での 32 ビット・インスタンスのもとのツール・カタログ・データベースの作成はサポートされません。

ツール・カタログ・データベース作成の非サポート (AIX、Solaris オペレーティング環境、および HP-UX)

ハイブリッド 64 ビット・プラットフォーム上の 64 ビットのインスタンスに対して、DB2 UDB のインストール中のツール・カタログ作成はサポートされません。ハイブリッド・プラットフォームには、以下のものがあります。

- AIX
- Solaris オペレーティング環境
- HP-UX
- 32 ビット・インスタンスと 64 ビット・インスタンスの両方をサポートするその他のプラットフォーム

5 64 ビット・インスタンスに対してツール・カタログを作成したい場合、DB2 UDB のイン
5 ストール後に、コマンド行プロセッサで **CREATE TOOLS CATALOG CLP** コマ
5 ンドを使用するか、またはコントロール・センターを使用して作成することができます。
5 また、この操作には、64 ビットの IBM Developer Kit for Java をインストールす
5 する必要があります。詳細については「DB2 管理ガイド」の『DB2 管理サーバー』セク
5 ションを参照してください。

5 Workgroup Server Edition 64 ビット・サーバー・インスタンスの制約事項

5 DB2 UDB Workgroup Server Edition および DB2 UDB Workgroup Server Unlimited
5 Edition は、64 ビット・サーバー・インスタンス用のライセンスが交付されていません。
5 これらの製品については、次のものを作成できます。

- 5 • 32 ビット・サーバー・インスタンス
- 5 • 32 ビットまたは 64 ビット・クライアント・インスタンス

CLI の非同期実行

CLI の非同期実行は使用できません。

2 パーティション・データベース上の NUM_LOG_SPAN 構成パラメーター

2 NUM_LOG_SPAN 構成パラメーターは、トランザクションの対象となりうるログ・ファ
2 イルの最大数を指定します。どのような場合でも、NUM_LOG_SPAN 設定に違反したト
2 ランザクションはロールバックされて、そのようなトランザクションの原因となったア
2 プリケーションをデータベースから強制的に排除します。

2 ただしパーティション・システムにおいては、db2loggr プロセスがアプリケーションを
2 強制排除できるのは、アプリケーションの調整ノードと、エラーを検出する db2loggr
2 プロセスのノードが同じ場合のみです。たとえば、3 つのデータベース・パーティショ
2 ン (0、1、および 2) をもつシステムの場合に、すべてのデータベース・パーティショ
2 ンで NUM_LOG_SPAN パラメーターを 2 に設定したとします。この場合、アプリケー
2 ションはデータベースのデータベース・パーティション 2 に接続してから、長時間実行
2 トランザクションを開始しますが、その対象は複数のログ・ファイルになります。デー
2 タベース・パーティション 1 上の db2loggr プロセスがそのエラーを最初に検出して
2 も、何も起きません。しかし同じ違反がデータベース・パーティション 2 でも起きる
2 と、db2loggr プロセスによってそのエラーが検出されて、トランザクションはロールバ
2 ックされてアプリケーションは強制的に排除されます。

複数フィックスパック環境での dasdrop コマンドに対する制限事項

代替フィックスパックは、それ自身のバージョンの **dasdrop** コマンドをインストール
します。このコマンドは、AIX では /usr/opt/db2_08_FPn/ パスにインストールされま
す。他の UNIX システムでは、このコマンドは /opt/IBM/db2/V8.FPn/ パスにインスト
ールされます。どちらの場合も、*n* はフィックスパックの番号です。

複数フィックスパックの環境では、セットアップできる DAS は一度に 1 つだけです。バージョン 8.1 の製品に対してか、または任意の代替フィックスパックに対して、DAS を作成することができます。バージョン 8.1 の製品に対して作成された DAS をドロップする場合は、任意のバージョンの **dasdrop** を使用して DAS をドロップすることができます。しかし、代替フィックスパックに対して作成された DAS をドロップする場合は、代替フィックスパックのバージョンの **dasdrop** を使用する必要があります。

たとえば、AIX オペレーティング・システム上での次のシナリオを考えてみます。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールします。
- 代替フィックスパック 1 をインストールします。
- バージョン 8.1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成します。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dascrt dasusr1
```

- DAS をドロップします。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップすることができます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop  
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

どちらも正しく機能します。

しかし、次の例ではどうでしょう。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールします。
- 代替フィックスパック 1 をインストールします。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成します。

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1
```

- この DAS をドロップします。

この場合は次のように、代替フィックスパック 1 の **dasdrop** コマンドを使用する必要があります。

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

バージョン 8.1 の **dasdrop** コマンドを使用すると、エラーになります。

この制限が適用されるのはバージョン 8.1 の製品に対してのみであり、通常フィックスパックには適用されません。たとえば、次のようにします。

- DB2 Universal Database バージョン 8.1 をインストールします。
- 通常フィックスパック 1 を適用します。これでバージョン 8.1 の **dasdrop** に関連する問題が訂正されます。
- 代替フィックスパック 1 をインストールします。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成します。


```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1
```

- この DAS をドロップします。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップすることができます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop
```

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

`/usr/opt/db2_08_01/` パス内のバージョンの **dasdrop** は通常フィックスパックを適用した時点で訂正されているため、どちらも正しく機能します。

データウェアハウス・センターの中国語 (簡体字) 非サポート

データウェアハウス・センターを中国語 (簡体字) で使用することはできません。そのため、この環境では次の従属 DB2 コンポーネントも使用できません。

- DB2 Warehouse Manager。
- インフォメーション・カタログ・センター (DB2 Warehouse Manager のインフォメーション・カタログの管理ウィザード・コンポーネントに従属)。

リモート・オブジェクトの日本語名

日本語のリモート・ソースのスキーマ、表、および列名内では、使用できない文字があります。Unicode マッピングの差が原因で、名前が NULL になる場合があります。詳細については、<http://www.ingrid.org/java/i18n/encoding/ja-conv.html> を参照してください。

Clean Data トランスフォーマーの制約事項

パラメーターの制約事項:

「Find and Replace」パラメーター

新規の Clean Data トランスフォーマー規則表に、Find および Replace 列でそれぞれ異なるデータ型が入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、Target Table プロパティー・ページおよび Column Mapping ページの両方で Target 列のデータ型を変更する必要があります。

「Discretize」パラメーター

新規の Clean Data トランスフォーマー規則表に、Bounds および Replace 列でそれぞれ異なるデータ型が入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、Target Table プロパティー・ページおよび Column Mapping マッピング・ページの両方で Target 列のデータ型を変更する必要があります。

iSeries プラットフォームの制約事項:

iSeries プラットフォームでは、新規の Clean Data トランスフォーマーはエラー処理を行いません。「すべて合致」合致タイプは、iSeries プラットフォーム上でのみ生成できます。

ウェアハウス・エージェントを使った Client Connect ウェアハウス・ソースの複製とアクセス

レプリケーションでのウェアハウス・エージェントの使用

ソース、ターゲット、キャプチャー・コントロール、またはアプライ・コントロール・サーバー (データベース) がクライアント・システムに対してリモートである場合、クライアントおよびウェアハウス・エージェント・システムのどちらでも、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードでデータベースをカタログする必要があります。クライアントとウェアハウス・エージェントの両方のシステムでソースをカタログした後で、ソース、ターゲット、キャプチャー、およびアプライ・データベースに接続できることを確認してください。

ウェアハウス・ソース、ウェアハウス・ターゲット、レプリケーション・キャプチャー、またはレプリケーション・アプライ・データベースに接続できない場合は、リモート・システムの環境変数 DB2COMM が TCP/IP に設定されていて、しかもポート番号は、クライアント・システムでカタログされたデータベース・パーティションのポート番号と一致することを確認してください。

リモート・システムのポート番号を確認するには、以下のコマンドを DB2 Universal Database コマンド・プロンプトで入力します。

```
get dbm cfg | grep SVCENAME
```

データベース・パーティションをカタログするときに、クライアント・システムのポート番号を指定します。

ウェアハウス・エージェントを使用した Client Connect ウェアハウス・ソースへのアクセス

Client Connect を使用して、ウェアハウス・エージェントで定義されたウェアハウス・ソースにアクセスする場合、クライアント・システムおよびウェアハウス・エージェント・システムの両方で、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードでソースがカタログされる必要があります。ODBC バージョンのウェアハウス・エージェントを使用している場合は、ウェアハウス・エージェント・サイトおよびクライアント・サイトの両方で、ソースを ODBC ソースとしてカタログする必要もあります。そうしないと、ウェアハウス・ソースにアクセスするウェアハウス・エージェントを必要とするアクションは失敗します。

インターバルを置いて実行するウェアハウス・プロセスのスケジューリング

インターバルを置いてウェアハウス・プロセスを実行するようスケジュールする場合は、プロセスのすべての実動ステップの実行に要する最長時間を判別して、それに応じたインターバルをスケジュールする必要があります。スケジュールされた時間間隔をプロセスが超過した場合は、後続のスケジュール済みのプロセスはすべて実行されず、またスケジュール変更されることもありません。

インポートとエクスポートに関するデータウェアハウス・センターの制約事項

リンク解除されたショートカットのプロセスをエクスポートし、.tag ファイルとして他のコントロール・データベースにインポートした場合、リンク解除されたショートカット・データは次の DWC3142 エラーを引き起こします。

```
<dirID> was not found in the Data Warehouse Center control database.
```

このエラーは、リンク解除されたショートカット dirID が変換されず、元のコントロール・データベースを参照したときに表示されます。

バージョン 8.1.2 以降のインストール後のウェアハウス・コントロール・データベースの初期化

フィックスパックを適用する場合や、新リリースの DB2 UDB またはデータウェアハウス・センターをインストールする場合、既存のコントロール・データベースを移行して、その中に収められているオブジェクトを更新する必要があります。また、バージョン 8.1.2 以降のインストール後、ウェアハウス・コントロール・データベースを再初期化する必要があります。

Cube Views サンプル・アプリケーションとサンプル・ソースの相違

DB2 Cube Views V8.1 は、db2mdapiclient.exe というサンプル・アプリケーションを提供しています。これは Cube Views のいくつかの重要な機能を例示するものです。このアプリケーションのソース・コードである db2mdapiclient.cpp が組み込まれています。初期リリースの DB2 Cube Views V8.1 では、アプリケーションはこのソース・コードを使って構築されました。バージョン 8.1.4 以後は、ソース・コードは変更されていませんが、アプリケーションは変更されています。ソース・コードはこれまでどおり有効ですが、アプリケーションと厳密には一致しません。

列のロードおよびインポート・ページでの IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポート

ロード・ウィザードまたはインポート・ノートブックを使用して、DBCS 文字の入った IXF 入力ファイルからのロードまたはインポートを設定すると、列ページは、ファイル内の列名を正しく表示しません。

ロード操作の失敗時の誤ったタスク・センター・インディケーターの表示

ロードが失敗した場合に、警告しか (エラーではない) 返されなかったときでも、やはりタスク・センターのタスク・アイコンに緑のチェックマークが表示されます。必ず、実行したロードが成功したかどうかをすべて確かめてください。

GUI ツールの最低限の表示設定

コントロール・センターなどの GUI ツールが正常に動作するには、最低 800 x 600 の画面解像度、および最低 32 色の表示パレットを使用する必要があります。

インフォメーション・カタログ表はパーティション化しない

インフォメーション・カタログ・マネージャーが使用する表は、1 つのデータベース・パーティション内に収まっていなければなりません。1 つのパーティション内に表を入れるのに利用できる方法は多数あります。以下の手順は、そのような目的のためのアプローチの 1 つです。

1. DB2 コマンド行プロセッサを開いて、以下のコマンドを発行します。

a. `CREATE DATABASE PARTITION GROUP partition_group_name
ON DBPARTITIONNUM partition_number`

b. `CREATE REGULAR TABLESPACE tablespace_name
IN DATABASE PARTITION GROUP partition_group_name
MANAGED BY SYSTEM USING ('cname')`

partition_group_name は、どちらのコマンドでも同じです。

2. 「スタート」->「プログラム」->「IBM DB2」->「ツールのセットアップ (Set-up tools)」->「インフォメーション・カタログ管理ウィザード (Manage Information Catalog wizard)」をクリックします。

3. 「オプション (Options)」ページで、表スペース名を「表スペース (Table space)」に指定します。

DYN_QUERY_MGMT の無効時の Query Patroller の制約事項

データベース構成パラメーター DYN_QUERY_MGMT が無効な場合、Query Patroller は以下のアクションを実行できません。

- 保留状態の照会を保留解除する
- フォアグラウンド内の実行中またはキューに入れられた照会を、バックグラウンド内で実行する

照会の保留状態を解除する場合、あるいはフォアグラウンド照会をバックグラウンド照会に変更する場合、DYN_QUERY_MGMT が DISABLE に設定されていると、エラー・メッセージが表示され、照会の状態は変更されません。保留状態の照会が実行予定になっており、その実行時に DYN_QUERY_MGMT が無効になっていた場合は、エラー・メッセージが `qpdiag.log` ファイルに書き込まれ、照会は保留状態のままになります。

5 今後の Query Patroller 結果表での DB2QPRT スキーマの使用

5 フィックスパック 5 より、新規結果表はすべて、サブミッターのスキーマではなくスキ
5 ーマ DB2QPRT で作成されます。

5 フィックスパック 5 のインストール前に作成されたプロファイルを持ち、以下のいずれ
5 かを所有する演算子に対しては、DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権が付与さ
5 れます。

- 5 • 編集権限のある MONITORING 特権
- 5 • 編集権限のある HISTORICAL ANALYSIS 特権

5 DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権は、Query Patroller がこのスキーマに最初
5 に結果表を作成する際に付与されます。

5 フィックスパック 5 のインストール後に、編集権限のある MONITORING 特権または
5 HISTORICAL ANALYSIS 特権を付与された演算子には、プロファイルの作成または更
5 新時に DB2QPRT スキーマに対する DROPIN 特権も付与されます。

5 ALTER WRAPPER SQL ステートメントの非サポート

5 ラッパーは変更できません。ALTER WRAPPER ステートメントはサポートされていま
5 せん。

ヘルス・インディケーターの制約事項

2 *db2.db2_op_status* ヘルス・インディケーターが停止状態に入ると、ヘルス・モニターは
2 このインディケーターに対するアクションを実行できません。この状態の原因になりう
2 るのは、たとえば、明示的な停止要求または異常終了に起因して、インディケーターが
2 モニターしているインスタンスが非アクティブになった場合です。異常終了の後は常に
2 インスタンスが自動的に再始動するようにしたければ、インスタンスが高可用に保たれ
2 るように障害モニターを構成する必要があります。

システム・モニター・スナップショット UDF の制約事項

3 スナップショット・ユーザー定義関数 (UDF) は、LIST DB DIRECTORY コマンドが発
3 行された場合に、「間接」または「ホーム」と表示される「ディレクトリー項目タイ
3 プ」の値をもつデータベース上で使用するための関数です。リモート・データベースに
3 対して UDF が使用された場合、その UDF は失敗し、次のエラーが表示されます。

3 SQL1427N An instance attachment does not exist.

4 V8.1 で導入されたスナップショット UDF は、モニター・スイッチ・コマンドおよび
4 API、またはモニター・リセット・コマンドおよび API と共に使用することはできませ
4 せん。この制限には、以下のものが含まれます。

- 4 • GET MONITOR SWITCHES
- 4 • UPDATE MONITOR SWITCHES

4 • RESET MONITOR

4 このような制限事項がある理由は、そのようなコマンドでは INSTANCE ATTACH が使
4 用されるのに対して、スナップショット UDF では DATABASE CONNECT が使用され
4 るためです。

確認済みの問題とその対処法

DB2 Universal Database Workgroup Server Edition 用の DB2 ライセン ス・ポリシー

「DB2 サーバー概説およびインストール」およびライセンス・センターのオンライン・
ツール・ヘルプでは別の記述がありますが、インターネット・ライセンス・ポリシーは
DB2 Universal Database Workgroup Server Edition では使用できません。インターネッ
ト・ユーザー用のライセンスが必要な場合は、DB2 Universal Database Workgroup
Server Unlimited Edition を購入する必要があります。

Linux で必要な IBM Developer Kit for Java 1.3.1 (x86、32 ビット)

DB2 UDB が、DB2 コントロール・センターを使用したり、ストアード・プロシージャ
およびユーザー定義関数などの Java アプリケーションを作成および実行したりする
には、IBM Developer Kit for Java 1.3.1 Service Release 4 が必要です。IBM
Developer Kit for Java のみがサポートされます。

IBM Developer Kit for Java は、Java を必要とするコンポーネントがインストールされ
ている場合にインストールされます。ただし、IBM Developer Kit for Java 1.3.1 がすで
にインストールされていることをインストーラーが検出した場合、再びインストールさ
れることはありません。IBM Developer Kit for Java 1.3.1 は独自のディレクトリーにイ
ンストールされ、以前のレベルの IBM Developer Kit for Java を上書きすることはない
です。

制約事項:

以下の DB2 UDB インストール方法のいずれか 1 つを使用した場合のみ、IBM
Developer Kit for Java のインストールが試みられます。

- GUI インストール・プログラム (db2setup)
- 応答ファイル・インストール (db2setup -r response_file)

手順:

IBM Developer Kit for Java を手動でインストールするには、
/cdrom/db2/linux/Java-1.3.1 ディレクトリーから以下のコマンドを実行してくださ
い。

```
rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.3.1-4.0.i386.rpm
```

5 このコマンドは IBM Developer Kit for Java を /opt/IBMJava2-131 ディレクトリーに
5 インストールします。

5 IBM Developer Kit for Java がインストールされたことを確認するには、UNIX® シェ
5 ル・プロンプトから以下のコマンドを実行してください。

5 `<path>/jre/bin/java -version`

5 `<path>` は、Java がインストールされるパスを表します。例えば、インストール・ディ
5 レクトリー・パスが /opt/IBMJava2-131/ の場合、コマンドは次のようになります。

5 `/opt/IBMJava2-131/jre/bin/java -version`

5 以下のような出力が得られます。

```
5 java version "1.3.1"  
5 Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.3.1)  
5 Classic VM (build 1.3.1, J2RE 1.3.1 IBM build  
5 cxia32131-20030329 (JIT enabled: jitc))
```

5 IBM Developer Kit for Java は、IBM developerWorks Web サイト
5 <http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/index.html> から入手できます。

中国語 (簡体字) ロケール (AIX)

3 AIX では、中国語 (簡体字) ロケール Zh_CN にバインドされたコード・セットが変更
3 されています。

- 3 • AIX バージョン 5.1.0000.0011 以上
- 3 • AIX バージョン 5.1.0 (保守レベル 2 以上を適用)

3 コード・セットは、GBK (コード・ページ 1386) から GB18030 (コード・ページ 5488
3 または 1392) に変更されました。DB2 Universal Database for AIX はもともと GBK
3 をサポートしており、Unicode を介して GB18030 コード・セットをサポートするので
3 DB2 Universal Database での Zh_CN ロケールのデフォルトのコード・セットは ISO
3 8859-1 (コード・ページ 819) になりますが、操作によっては、このロケールのデフォル
3 トの地域はアメリカ合衆国 (US) にもなります。

この制約事項に対する対処法として、以下の 2 通りのオプションがあります。

- ロケールのコード・セットを GB18030 から GBK にオーバーライドし、地域を US から China (この地域 ID は CN、地域コードは 86) にオーバーライドすることができます。
- 別の中国語 (簡体字) ロケールを使用することができます。

最初のオプションを使用することにした場合、以下のコマンドを発行します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1386
db2set DB2TERRITORY=86
db2 terminate
db2stop
db2start
```

2 番目のオプションを使用することにした場合、ロケールを Zh_CN から ZH_CN または zh_CN に変更します。ZH_CN ロケールのコード・セットは Unicode (UTF-8) であるのに対して、zh_CN ロケールのコード・セットは eucCN (コード・ページ 1383) です。

中国語 (簡体字) ロケール (Red Hat Linux)

5 Red Hat Enterprise Linux [RHEL] バージョン 2.1 および 3 を含む、Red Hat バージョ
5 ン 8 以降では、中国語 (簡体字) 用のデフォルトのコード・セットが、GBK (コー
5 ド・ページ 1386) から GB18030 (コード・ページ 5488 または 1392) に変更されまし
5 ました。

3 DB2 Universal Database for Linux はもともと GBK をサポートしており、Unicode を
3 介して GB18030 コード・セットをサポートするので DB2 Universal Database でのデフ
3 ォルトのコード・セットは ISO 8859-1 (コード・ページ 819) になりますが、操作によ
3 っては、このデフォルトの地域はアメリカ合衆国 (US) にもなります。

3 この制約事項に対する対処法として、以下の 2 通りのオプションがあります。

- 3 • Red Hat のロケールのコード・セットを GB18030 から GBK にオーバーライドし、
3 地域を US から China (この地域 ID は CN、地域コードは 86) にオーバーライド
3 することができます。
- 3 • 別の中国語 (簡体字) ロケールを使用することができます。

3 最初のオプションを使用することにした場合、以下のコマンドを発行します。

```
3 db2set DB2CODEPAGE=1386
3 db2set DB2TERRITORY=86
3 db2 terminate
3 db2stop
3 db2start
```

3 最初のオプションを使用することにした場合、以下のコマンドのいずれかを発行しま
3 す。

```
3 export LANG=zh_CN.gbk
3 export LANG=zh_CN
3 export LANG=zh_CN.utf8
```

3 zh_CN に関連したコード・セットは eucCN またはコード・ページ 1383、zh_CN.utf8
3 はコード・ページ 1208 です。

Merant Driver Manager の非互換性 (UNIX)

Merant Driver Manager が、UNIX で DB2 の ODBC ドライバーにアクセスする場合、Unicode サポートとの非互換が発生します。これらの非互換性が原因で、アプリケーションが Unicode の使用を要求しなかった場合でも、Merant Driver Manager で Unicode が使用されるようになります。この状態に起因して、データウェアハウス・センター、インフォメーション・カタログ・マネージャー、および MQSI のような、IBM 以外のデータ・ソースのサポートのために Merant Driver Manager を必要とするコンポーネントで問題が起きることがあります。永久的なソリューションが入手可能になるまで、Unicode サポートを使用せずに、代替の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリーを使用することができます。

Unicode サポートを使用しない代替の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリーは、DB2 UDB Version 8.1 for AIX、DB2 UDB Version 8.1 for HP-UX、および DB2 UDB Version 8.1 for Solaris Operating Environment に組み込まれています。この代替ライブラリーを使用するには、そのコピーを作成し、コピーに元の DB2 ODBC ドライバー・ライブラリー名を付ける必要があります。

注: 代替の (L36) ライブラリーには、DB2 JDBC ドライバーに必要な Unicode 機能が組み入れられています。WebSphere Application Server を含む JDBC アプリケーションは、このライブラリーを使用して、DB2 UDB で正常に作業を行うことができます。

AIX、HP-UX、または Solaris オペレーティング環境で、非 Unicode ODBC ライブラリーに切り替えるには、以下の説明に従ってください。これは手動によるプロセスであるため、連続したフィックスバックやモディフィケーション・レベルを適用した後も含め、製品のアップデートのたびに実行する必要があります。

手順:

AIX

必要なライブラリーを AIX 上に作成するには、以下を実行します。

1. インスタンス所有者として **db2stop force** コマンドを使用し、すべてのデータベース・インスタンスをシャットダウンします。
2. DB2 管理サーバー (DAS) インスタンス ID を使用し、**db2admin stop force** コマンドで DAS インスタンスをシャットダウンします。
3. /usr/lpp/db2_81/lib ディレクトリーの元の db2.o ファイルをバックアップします。
4. root 権限を使用し、**slibclean** コマンドを発行します。
5. ファイル db2_36.o をバックアップ・ファイル db2.o にコピーし、所有権および権限が整合したままであることを確認します。以下のコマンドを使用します。


```
5 cp db2_36.o db2.o
5 -r--r--r-- bin:bin for db2.o
```

元のオブジェクトにスイッチバックするには、db2_36.o ファイルの代わりにバックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

5 Solaris オペレーティング環境

必要なライブラリーを Solaris オペレーティング環境上に作成するには、以下を実行します。

- 5 1. インスタンス所有者として **db2stop force** コマンドを使用し、すべてのデータベース・インスタンスをシャットダウンします。
- 5 2. DB2 管理サーバー (DAS) インスタンス ID を使用し、**db2admin stop force** コマンドで DAS インスタンスをシャットダウンします。
- 5 3. /opt/IBMDB2/V8.1/lib ディレクトリーの元の libdb2.so.1 ファイルをバックアップします。
- 5 4. ファイル libdb2_36.so.1 をバックアップ・ファイル libdb2.so.1 にコピーし、所有権および権限が整合したままであることを確認します。以下のコマンドを使用します。

```
5 cp libdb2_36.so.1 libdb2.so.1
5 -r-xr-xr-x bin:bin libdb2.so.1
```

- 5 5. データベース・インスタンスごとに、**db2iupdt <instance>** コマンドを発行し、DAS インスタンスに **dasupdt <das_instance>** コマンドを発行します。

元のオブジェクトにスイッチバックするには、libdb2_36.so.1 ファイルの代わりにバックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

5 HP-UX

必要なライブラリーを HP-UX 上に作成するには、以下を実行します。

- 5 1. **db2stop force** コマンドを使用して、すべてのデータベース・インスタンスをシャットダウンします。
- 5 2. **db2admin stop force** コマンドを使用して、DB2 管理サーバー (DAS) インスタンスをシャットダウンします。
- 5 3. /opt/IBMDB2/V8.1/lib ディレクトリーの元の libdb2.s1 ファイルをバックアップします。
- 5 4. ファイル libdb2_36.s1 をバックアップ・ファイル libdb2.s1 にコピーして、所有権と許可が整合したままであることを確認します。次のコマンドを使用して整合性を確認します。

```
5 cp libdb2_36.s1 libdb2.s1
5 -r-xr-xr-x bin:bin for libdb2.s1
```

5 5. データベース・インスタンスごとに、**db2iupdt <instance>** コマンドを発
5 行し、DAS インスタンスに **dasupdt <das_instance>** コマンドを発行し
5 ます。

5 元のオブジェクトにスイッチバックするには、libdb2_36.sl ファイルの代わりに
5 バックアップ・ファイルを使用して、同じ手順に従ってください。

5 その他の UNIX オペレーティング・システム

5 他の UNIX オペレーティング・システム上の DB2 UDB および Merant Driver
5 Manager に関して疑問点がある場合は、IBM サポートに連絡してください。

データ・リンク・サーバーのバックアップでの Tivoli Storage Manager アー カイブ・サーバー (AIX、Solaris オペレーティング環境) の非使用

問題: DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 のインストールまたはこのバージョン
への移行で、データ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) で開始された Tivoli®
Storage Manager アーカイブ・サーバーへのデータ・リンク・サーバー・データのバック
アップができない。以下のエラー・メッセージのいずれかが画面に表示されるか、ま
たはインストール状況のレポートに書き出されます。

DLFM129I: DLFM_DB *db-scope* の自動バックアップが起動されました。
バックアップ完了までお待ちください。

DLFM901E: システム・エラーが発生しました。戻りコード = "-2062"。
現在のコマンドは処理できませんでした。
追加情報については、db2diag.log ファイルを参照してください。

— または —

DLFM811E: 現行 DLFM データベースをバックアップすることができませんでした。
戻りコード = "-2062"。DLFM 移行は停止しています。

DLFM901E: システム・エラーが発生しました。戻りコード = "-2062"。
現在のコマンドは処理できませんでした。
追加情報については、db2diag.log ファイルを参照してください。

原因: DB2 Data Links Manager インストーラー・プログラムが、Tivoli Storage
Manager を、データ・リンクのサーバーに対するアーカイブ (バックアップ) サーバー
として使用するために必要な変数を設定できませんでした。

ヒント: Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する予定の場合に、
DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 のインストールまたはこのバージョンへの移
行がまだ完了していなければ、この問題が発生しないようにすることができます。ま
ず、インストーラー・プログラムでは Tivoli Storage Manager バックアップ・オプショ
ンを使用しないでください。次に、下記のステップ 2 に記述しているように、Data
Links Manager の管理者プロファイルを手動で構成し、該当する Tivoli Storage Manager
の変数を組み込んでください。このタスクを両方とも完了したら、インストールある
いは移行を続行することができます。

対処策: 次のタスクをリストの順に実行します。

1. 次のコマンドを使用して、DLFM データベースのバックアップをとります。

```
db2 backup <d1fm_db><path>
```

詳細は次のとおりです。

- <d1fm_db> は DLFM データベースの名前です。デフォルトでは、データベースは DLFM_DB という名前です。
 - <path> は選択項目のバックアップ・ストレージ・ロケーションへのディレクトリー・パスです。
2. Data Links Manager の管理者プロファイルを手動で構成し、該当する Tivoli Storage Manager の変数を組み込んでください。手動構成の手順および必要な変数は、次のドキュメンテーションのトピックで説明されています。
 - Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (AIX)
 - Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (Solaris オペレーティング環境)

これらのトピックについては、オンラインの DB2 インフォメーション・センターまたは「DB2 Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」の『システム管理オプション』の章で確認することができます。

- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 の新規インストールを完了している場合は、これで終わりです。
- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 に移行する場合は、移行ユーティリティ・プログラム **db2dlmmg** を再実行します。

4 SQLFLAG(STD) プリコンパイラー・オプション・エラー

4 SQLFLAG(STD) プリコンパイル・オプションを使用可能にしておく、 「Abend C6
4 occurred while running Precompile program DSNHPC」というエラーが生じます。

4 デベロッパー・センターを使用して DB2 for z/OS, Version 8 で実行する SQL ス
4 トアード・プロシージャを作成するときには、 SQLFLAG (STD) プリコンパイル・オ
4 プションを除去してください。

5 SQL ルーチン・コンパイル・コマンド 用 DB2 UDB パス (Windows)

5 通常、DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND を設定する必要はありません。ただ
5 し、これが Windows で設定されている場合、変数 %DB2PATH% の値であるデフォ
5 ルト・パス C:\Program Files\IBM\SQLLIB の Program と Files の間にスペースがある
5 ことが原因で、問題が発生する可能性があります。コマンド値全体が引用符で囲まれている
5 場合でもこの問題が発生する可能性があります。

5 その対処法として、%DB2PATH% 値に短形を使用します。デフォルトの場合、
5 C:¥PROGRAM~1¥IBM¥SQLLIB となります。一方の方法では、DB2 UDB のインストール
5 先のパスの短形に %DB2PATH% を設定することができます。

```
5 set db2path=C:¥PROGRAM~1¥IBM¥SQLLIB
```

5 次に、デフォルト値を使用して DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND を実行でき
5 ます。

```
5 db2set DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND="c1 -0x -w2 -TC -D_X86_=1 -MD  
5 -I%DB2PATH%¥include SQLROUTINE_FILENAME.c /link -d11  
5 -def:SQLROUTINE_FILENAME.def /out:SQLROUTINE_FILENAME.d11  
5 %DB2PATH%¥lib¥db2api.lib"
```

5 もう一方の方法として、%DB2PATH% のパス値の短形を置き換えることで、コマンド
5 自身の値を変更できます。

```
5 db2set DB2_SQLROUTINE_COMPILE_COMMAND="c1 -0x -w2 -TC -D_X86_=1 -MD  
5 -IC:¥PROGRAM~1¥IBM¥SQLLIB¥include SQLROUTINE_FILENAME.c /link -d11  
5 -def:SQLROUTINE_FILENAME.def /out:SQLROUTINE_FILENAME.d11  
5 C:¥PROGRAM~1¥IBM¥SQLLIB¥lib¥db2api.lib"
```

5 実際に使用するパスは、DB2 UDB のインストール先のものでなければなりません。例
5 えば、DB2 UDB が D: ドライブの同一パスにインストールされている場合は、
5 D:¥PROGRAM~1¥IBM¥SQLLIB という設定になります。

1 ドキュメンテーションの全カテゴリーをインストールしていない場合の AIX に 1 おけるドキュメンテーション検索の障害

1 DB2 HTML ドキュメンテーション CD に入っているすべてのカテゴリーのドキュメン
1 テーションをインストールしていない場合に、「すべてのトピック (All topics)」での検
1 索を行うと失敗することがあります。ブラウザの Java コンソールに
1 InvalidParameterException と報告されて、検索結果が表示されない場合があります。

1 ドキュメンテーション検索の問題に対処するには、以下のいずれかを実行してくださ
1 い。

- 1 • 「検索 (Search)」ウィンドウの「検索範囲 (Search scope)」リスト・ボックスで選
1 択して、検索の範囲を狭くします。
- 1 • DB2 HTML ドキュメンテーションの CD からすべてのドキュメンテーション・カテ
1 ゴリーをインストールします。

1 Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション検索の問題

1 ブラウザーが Java 2 JRE V1.4.0 を使用している場合に、スペースの入ったパス (たと
1 えば、C:¥Program Files¥SQLLIB¥doc¥) にドキュメンテーションがインストールされて
1 いると、ドキュメンテーション検索アプレットが失敗し、ブラウザの Java コンソ
1 ールに InvalidParameterException がレポートされて検索結果が表示されない場合がありま
1 す。この問題は、JRE V1.4.1 では修正されています。

- ドキュメンテーション検索の問題に対処するには、以下のいずれかを実行してください。
- ブラウザーの JRE のバージョンを 1.4.1
(<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/download.html> から入手可能) にアップグレードします。
 - ブラウザーの JRE のバージョンを 1.3.x
(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java/> から入手可能) にダウングレードします。

DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示

DB2 GUI ツールの使用中に、インド語文字の表示で問題がある場合は、必要なフォントがシステムにインストールされていない可能性があります。

DB2 Universal Database には、以下の IBM TrueType および OpenType プロポーショナル・インド語言語フォントがパッケージされています。そのようなフォントは、以下のいずれかの CD の font ディレクトリーにあります。

- IBM Developer Kit, Java Technology Edition, Version 1.3.1 for AIX operating systems on 64-bit systems
- Java application development and Web administration tools supplement for DB2, Version 8.1

これらのフォントは、DB2 UDB でのみ使用されます。これらのフォントの一般または無制限の販売、または配布を行うことはできません。

表 6. DB2 Universal Database にパッケージされたインド語のフォント

書体	重み	フォント・ファイル名
Devanagari MT for IBM	Medium	devamt.ttf
Devanagari MT for IBM	Bold	devamtb.ttf
Tamil	Medium	TamilMT.ttf
Tamil	Bold	TamilMTB.ttf
Telugu	Medium	TeluguMT.ttf
Telugu	Bold	TeleguMTB.ttf

フォントのインストールおよび font.properties ファイルの変更方法についての詳細は、IBM Development Kit for Java のドキュメンテーションの国際化対応の項を参照してください。

さらに、以下の Microsoft 製品には、GUI ツールで使用できるインド語フォントが付属しています。

- Microsoft Windows 2000 オペレーティング・システム
- Microsoft Windows XP オペレーティング・システム
- Microsoft Publisher

- Microsoft Office

zSeries サーバーでの GUI ツールの非サポート (Linux)

DB2 セットアップ・ウィザードを除いて、Linux オペレーティング・システムが稼働中の zSeries サーバーでは、GUI ツールは使用できません。クイック・ツアーなどの、インストール・ランチパッドから通常起動されるすべての項目がこの制限の対象になります。

このようなシステムで GUI ツールを使用したい場合は、別のシステム構成をもったクライアント・システムに管理ツールをインストールし、このクライアントを使用して zSeries サーバーに接続してください。

タグ言語ファイルのインポート時のインフォメーション・カタログ・センター・ログ・ファイルの非生成

タグ言語ファイルをインフォメーション・カタログ・センターへインポートしたのに、インフォメーション・カタログ・センターのログ・ファイルが生成されない場合には、以下のトラブルシューティング・ステップを実行します。

コマンド行から **db2icmimport** を実行している場合:

- 出力ファイル (.xml, .out, .err, .log) が生成されなかった場合、コマンド行にエラーが存在する可能性があります。最初の 5 つの引き数である `UserId`、`Password`、`Database`、`Catalog`、および `Tagfile` が正確であることを確認します。 **db2icmimport** と入力して構文を表示します。これで問題が解決しない場合、**db2icmimport** を変更してから、`-g` オプションを使用することによって **db2icmimport** コマンドの出力をキャプチャーし、出力をファイルに保管します。以下に例を示します。

```
db2javit -j:com.ibm.db2.common.icm.tag.IcmImport -w: -i:  
-o:"-Xmx128m -Xms32m" -g:"d:¥temp¥myimport.trc" ...
```
- ログ・ファイルが生成されなかった場合、通常は構文解析エラーがあります。 `.xml` ファイルと `.out` ファイルを調べてください。可能であれば、タグ言語ファイルの先頭に `":COMMIT.CHKPID(DEBUG)"` コマンドを挿入します。このコマンドは、デバッグ・レポート・メッセージを生成し、 `.xml` および `.out` ファイルに構文解析エラーがないかどうかを調べます。
- 構文解析後、エラーが `.log` ファイルに示されているはずですが、デバッグ・レポートが生成されたら、`.log` ファイルと `.out` ファイルで詳細を調べてください。
- 常に `.err` ファイルを調べて、ランタイム・エラーがないかどうかを確認します。

インフォメーション・カタログ・センターの GUI を使用してタグ言語ファイルをインポートする場合:

- 4 • GUI インターフェースを使用してタグ言語ファイルをインポートする場合、
4 .out ファイルも .err ファイルも生成されません。
- 4 • .log ファイルまたは .xml ファイルが生成されたら、それらのファイルを使用
4 してデバッグしてみてください。
- 4 • .log ファイルも .xml ファイルも生成されないかまたは役に立たない場合、
4 コマンド行からインポート・プロセスを実行して、詳細を表示します。

6 Query Patroller パッケージのバインディング

6 フィックスパックの適用後に Query Patroller パッケージがバインドされていないと、
6 DBADM 権限のないユーザーや正しい Query Patroller 特権をもたないユーザーは、ク
6 エリー・パトローラー・センターまたは Query Patroller コマンド行を使用しようとした
6 ときに、以下のエラーを受け取ることがあります。

6 SQL0001N - Binding or precompilation did not complete successfully.

6 クエリー・パトローラー・センターを使用した場合、SQL0001N エラーが qpdiag.log フ
6 ァイルに記録されます。Query Patroller のコマンド行を使用した場合、SQL0001N がコ
6 ンソールに戻されます。

6 自動バインディングを行うための自動バインド・コードがあります。ただし、Query
6 Patroller パッケージ内のすべてのステートメントを実行するのに必要な特権を接続ユー
6 ザーがもっていないと、自動バインディングは失敗します。この問題の症状は、クエリ
6 ー・パトローラー・センターでのフォルダーの欠如として示されます。

6 この問題が起きないようにするには、フィックスパックの適用後に、DBADM 権限ま
6 たは必要な特権をもったユーザーが手動で qpserver.lst パッケージをバインドする必要
6 があります。

1 機密保護機能のある環境 (Windows)

1 Windows システムでの管理者ではないユーザーが Windows 上で DB2 Universal
1 Database を使用すると、ファイル許可の問題が起こる場合があります。SQL1035N、
1 SQL1652N、または SQL5005C のエラー・メッセージが表示された場合の考えられる原因
1 と対策を以下に示してあります。

1 ユーザーは、**sqllib** ディレクトリーに対する十分な権限を持っていない:

1 **問題** DB2 CLP またはコマンド・ウィンドウを開こうとすると、SQL1035N または
1 SQL1652N エラーになる。DB2 Universal Database コード (コア・ファイル)
1 は書き込み特権が限定されるディレクトリー構造にインストールされますが、
1 いくつかの DB2 Universal Database ツールでは、DB2INSTPROF ディレクト
1 リーでファイルの書き込みと作成を行う必要があります。

1 **対処法** ユーザーに少なくとも MODIFY 許可を付与できる新規ディレクトリーを作成

し、 **db2set -g db2tempdir** を使用して新規ディレクトリーを指すようにする
か、または Windows システム環境の db2tempdir 変数を設定します。

ユーザーが **SYSADM_GROUP** に属していても **sqllib¥instance_dir** ディレクトリー
へ書き込むための十分な権限がない:

問題 データベース・マネージャー構成ファイルを更新しようとする (update dbm
cfg)、SQL5005C システム・エラーになる。ユーザーを **SYSADM_GROUP** に
追加しても、そのユーザーには **sqllib¥instance_dir** ディレクトリーに書き込む
ために必要な NTFS アクセス権はありません。

最初の対策

ファイル・システム・レベルで **instance_dir** ディレクトリーの少なくとも
MODIFY 許可をユーザーに付与します。

2 番目の対策

ユーザーに少なくとも MODIFY 許可を付与できる新規ディレクトリーを作成
します。 **db2set db2instprof** コマンドを使用して、新しいディレクトリーを
指定します。 **db2instprof** で指定した新規インスタンス・ディレクトリーの下
に情報が保管されるようにインスタンスを再作成するか、または古いインスタ
ンス・ディレクトリーを新規ディレクトリーに移動する必要があります。

XML Extender のサンプル・プログラムの名前変更

一部の XML Extender サンプル・プログラムには、他のインストール済みプログラムと
同じ名前が付いている可能性があります。XML Extender サンプル・プログラムと同名
の別のプログラミングを不用意に呼び出すと、XML ファイルが損傷を受けることがあ
ります。古い XML Extender サンプル・プログラム名と、それに代わる競合の可能性の
低い新規のプログラム名を以下に一覧で示してあります。必ず旧称の変わりに新しいサ
ンプル・プログラム名を使って、XML ファイルに損傷を与えないようにしてくださ
い。

表 7. XML Extender の置換用サンプル・プログラム (Windows)

旧プログラム (使用しないでください)	新プログラム (これを使用してください)
insertx.exe	dxxisrt.exe
retrieve.exe	dxxretr.exe
retrieve2.exe	dxxretr2.exe
retrievec.exe	dxxretrc.exe
shred.exe	dxxshrd.exe
tests2x.exe	dxxgenx.exe
tests2xb.exe	dxxgenxb.exe
tests2xc.exe	dxxgenxc.exe

表 8. XML Extender の置換用サンプル・プログラム (UNIX)

旧プログラム (使用しないでください)	新プログラム (これを使用してください)
insertx	dxxisrt
retrieve	dxxretr
retrieve2	dxxretr2
retrievec	dxxretrc
shred	dxxshrd
tests2x	dxxgenx
tests2xb	dxxgenxb
tests2xc	dxxgenxc

サンプル sqx ファイルと連携した新規サンプル・プログラムの使用

上記の実行可能ファイルのソース・コード (.sqx ファイル) は、ご使用のシステムの `samples¥db2xml¥c` ディレクトリーにあります。ソース・ファイルには、古い名前が付いたままになっています。ソース・コードに変更を加える場合、新しくコンパイルした実行可能ファイル (古い名前で) を、 `sqllib¥bin` ディレクトリーにコピーします。Windows プラットフォームでは、別のコピーを作成し、上記の新しい名前に変更してから、 `bin` ディレクトリーにコピーする必要があります。両方のコピーで、 `bin` ディレクトリーの既存のファイルを置き換えます。例えば、新しいバージョンの `shred.exe` をコンパイルしたら、2 つのコピーを作成し、 `bin` ディレクトリーのファイルを置き換えます。1 つは `shred.exe` という名前ですが、もう 1 つは `dxxshrd.exe` に名前変更します。UNIX プラットフォームでは、古い名前のファイルを、新しくコンパイルしたバージョンに置き換えるだけで済みます。これらのサンプルから新しい実行可能ファイルを作成する場合は、 `¥SQLLIB¥samples¥db2xml¥c¥` ディレクトリーから `¥SQLLIB¥bin¥` ディレクトリーに新しいファイルをコピーし、余分のコピーを作成して、それを上の表に合わせて名前変更します。

非ユニーク属性名およびエレメント名の入った XML Extender 内の文書の分解

今後は、DXXQ045E エラーを生じないで、同じ表または別の表の別の列にマッピングされている非ユニーク属性または非ユニーク・エレメント名 (またはその両方) の入った文書を分解できるようになりました。以下に示すのは、非ユニーク属性および非ユニーク・エレメント名を備えた XML 文書の一例です。

```
<Order ID="0001-6789">
  <!-- Note: attribute name ID is non-unique -->
  <Customer ID = "1111">
    <Name>John Smith</Name>
  </Customer>
  <!-- Note: element name Name is non_unique -->
  <Salesperson ID = "1234">
    <Name>Jane Doe</Name>
```

```

4         </Salesperson>
4         <OrderDetail>
4             <ItemNo>xxxx-xxxx</ItemNo>
4             <Quantity>2</Quantity>
4             <UnitPrice>12.50</UnitPrice>
4         </OrderDetail>
4         <OrderDetail>
4             <ItemNo>yyyy-yyyy</ItemNo>
4             <Quantity>4</Quantity>
4             <UnitPrice>24.99</UnitPrice>
4         </OrderDetail>
4     </Order>

```

4 重複しているエレメントと属性を別々の列にマッピングする付属 DAD は、次のように
4 なります。

```

4 <element_node name="Order">
4   <RDB_node>
4     <table name="order_tab" key="order_id"/>
4     <table name="detail_tab"/>
4     <condition>
4       order_tab.order_id = detail_tab.order_id
4     </condition>
4   </RDB_node>
4
4   <!--attribute ID duplicated below, but mapped to a different col-->
4   <attribute_node name="ID">
4     <RDB_node>
4       <table name="order_tab" />
4       <column name="order_id" type="char(9)"/>
4     </RDB_node>
4   </attribute_node>
4
4   <element_node name="Customer">
4     <!--attribute ID duplicated above, but mapped to a different col-->
4     <attribute_node name="ID">
4       <RDB_node>
4         <table name="order_tab" />
4         <column name="cust_id" type="integer"/>
4       </RDB_node>
4     </attribute_node>
4
4     <!--element name duplicated below, but mapped to a different col-->
4     <element_node name="Name">
4       <text_node>
4         <RDB_node>
4           <table name="order_tab" />
4           <column name="cust_name" type="char(20)" />
4         </RDB_node>
4       </text_node>
4     </element_node>
4   </element_node>
4
4   <element_node name="Salesperson">
4     <!--attribute ID duplicated above, but mapped to a different col-->

```

```

4         <attribute_node name="ID">
4             <RDB_node>
4                 <RDB_node>
4                     <table name="order_tab" />
4                         <column name="salesp_id" type="integer"/>
4                 </RDB_node>
4             </attribute_node>
4
4         <!--element name duplicated above, but mapped to a different col-->
4         <element_node name="Name">
4             <text_node>
4                 <RDB_node>
4                     <table name="order_tab" />
4                         <column name="salesp_name" type="char(20)" />
4                     </RDB_node>
4                 </text_node>
4             </element_node>
4         </element_node>
4
4         <element_node name="OrderDetail" multi_occurrence="YES">
4             <element_node name="ItemNo">
4                 <text_node>
4                     <RDB_node>
4                         <table name="detail_tab" />
4                             <column name="itemno" type="char(9)" />
4                         </RDB_node>
4                     </text_node>
4                 </element_node>
4             <element_node name="Quantity">
4                 <text_node>
4                     <RDB_node>
4                         <table name="detail_tab" />
4                             <column name="quantity" type="integer"/>
4                         </RDB_node>
4                     </text_node>
4                 </element_node>
4             <element_node name="UnitPrice">
4                 <text_node>
4                     <RDB_node>detail_tab" />
4                         <table name="detail_tab" />
4                             <column name="unit_price" type="decimal(7,2)" />
4                         </RDB_node>
4                     </text_node>
4                 </element_node>
4             </element_node>
4         </element_node>

```

上記の文書を分解した後の表の内容は、次のサンプルのようになります。

ORDER_TAB:

ORDER_ID	CUST_ID	CUST_NAME	SALESP_ID	SALESP_NAME
0001-6789	1111	John Smith	1234	Jane Doe

DETAIL_TAB:

ORDER_ID	ITEMNO	QUANTITY	UNIT_PRICE
0001-6789	xxxx-xxxx	2	12.50
0001-6789	yyyy-yyyy	4	24.99

注: 複数のエレメントと属性を同一表の同一列にマップするには、その表の別名を定義し、その別名をマッピングの 1 つの DAD <table> エレメントで使用します。

DB2 Connect の使用時の SNA と TCP/IP の相違

SNA を使用して OS/390 システムに接続すると、新規接続の作成時にホスト VTAM 層は自動的にコミットします。自動コミットによってホスト側のスレッド状態は非アクティブになることができるので、スレッドは即時に非アクティブになります。

ただし、TCP/IP を使用して OS/390 システムに接続する場合、自動コミットは発生しません。接続後、アプリケーション自身が明示的にコミットし、ホスト上でのスレッドの非アクティブ化を許可する必要があります。明示的にコミットしない場合、スレッドはアイドル状態になりタイムアウトします。

接続後に接続がアイドル状態になる場合の解決策としては、明示的コミットを実行するようにアプリケーションを書き直します。

ドキュメンテーションの更新

管理: パフォーマンスのチューニング

6 DB2_ENABLE_BUFDPD レジストリー変数のデフォルト値

6 DB2_ENABLE_BUFDPD レジストリー変数のデフォルト値は ON に変更されました。

アプリケーション開発: コール・レベル・インターフェース (CLI)

6 コール・レベル・インターフェース (CLI) に次の 3 つのキーワードが新たに追加され
6 ました。

- 6 • MapDateDescribe
- 6 • MapTimeDescribe
- 6 • MapTimestampDescribe

6 MapDateDescribe CLI/ODBC 構成キーワード

6 キーワードの説明:

6 DATE 列とパラメーター・マーカの記述時に戻される SQL データ型を制御
6 します。

6 db2cli.ini キーワードの構文:

6 MapDateDescribe = 0 | 1 | 2

6 デフォルト設定:

6 DATE データのデフォルトの SQL データ型が戻されます: SQL_DATE (ODBC
6 2.0 の場合) または SQL_TYPE_DATE (ODBC 3.0 の場合)

6 使用上の注意:

6

6 DATE 列とパラメーター・マーカの記述時に戻される SQL データ型を制御するに
6 は、MapDateDescribe を次のように設定します。

- 6 • 0 - デフォルトの SQL データ型が戻されます: SQL_DATE (ODBC 2.0 の場合) また
6 は SQL_TYPE_DATE (ODBC 3.0 の場合)
- 6 • 1 - SQL_CHAR SQL データ型が戻されます。
- 6 • 2 - SQL_WCHAR SQL データ型が戻されます。

6 以下の DB2 CLI 関数だけが、MapDateDescribe の設定によって影響を受けます。

- 6 • SQLDescribeCol()

6 • SQLDescribeParam()
6 • SQLGetDescField()
6 • SQLGetDescRec()
6 DB2 CLI カタログ関数はこのキーワードによって影響を受けません。

6 **MapTimeDescribe CLI/ODBC 構成キーワード**

6 **キーワードの説明:**

6 TIME 列とパラメーター・マーカの記述時に戻される SQL データ型を制御
6 します。

6 **db2cli.ini キーワードの構文:**

6 MapTimeDescribe = 0 | 1 | 2

6 **デフォルト設定:**

6 TIME データのデフォルトの SQL データ型が戻されます: SQL_TIME (ODBC
6 2.0 の場合) または SQL_TYPE_TIME (ODBC 3.0 の場合)

6 **使用上の注意:**

6 TIME 列とパラメーター・マーカの記述時に戻される SQL データ型を制御するに
6 は、MapTimeDescribe を次のように設定します。

- 6 • 0 - デフォルトの SQL データ型が戻されます: SQL_TIME (ODBC 2.0 の場合) また
6 は SQL_TYPE_TIME (ODBC 3.0 の場合)
- 6 • 1 - SQL_CHAR SQL データ型が戻されます。
- 6 • 2 - SQL_WCHAR SQL データ型が戻されます。

6 以下の DB2 CLI 関数だけが、MapTimeStampDescribe の設定によって影響を受けます。

- 6 • SQLDescribeCol()
- 6 • SQLDescribeParam()
- 6 • SQLGetDescField()
- 6 • SQLGetDescRec()

6 DB2 CLI カタログ関数はこのキーワードによって影響を受けません。

6 **MapTimestampDescribe CLI/ODBC 構成キーワード**

6 **キーワードの説明:**

6 TIMESTAMP 列とパラメーター・マーカの記述時に戻される SQL データ型
6 を制御します。

6 **db2cli.ini キーワードの構文:**

6 MapTimestampDescribe = 0 | 1 | 2

6 **デフォルト設定:**
6 TIMESTAMP データのデフォルトの SQL データ型が戻されます:
6 SQL_TIMESTAMP (ODBC 2.0 の場合) または SQL_TYPE_TIMESTAMP
6 (ODBC 3.0 の場合)

6 **使用上の注意:**

6 TIMESTAMP 列とパラメーター・マーカーの記述時に戻される SQL データ型を制御する
6 には、MapTimestampDescribe を次のように設定します。

- 6 • 0 - デフォルトの SQL データ型が戻されます: SQL_TIMESTAMP (ODBC 2.0 の場
6 合) または SQL_TYPE_TIMESTAMP (ODBC 3.0 の場合)
- 6 • 1 - SQL_CHAR SQL データ型が戻されます。
- 6 • 2 - SQL_WCHAR SQL データ型が戻されます。

6 以下の DB2 CLI 関数だけが、MapTimeStampDescribe の設定によって影響を受けます。

- 6 • SQLDescribeCol()
- 6 • SQLDescribeParam()
- 6 • SQLGetDescField()
- 6 • SQLGetDescRec()

6 DB2 CLI カタログ関数はこのキーワードによって影響を受けません。

コマンドの解説

6 **db2inidb - ミラーリングされたデータベース・コマンドの初期化**

6 db2inidb *database* を mirror コマンドとして発行する前に、db2 connect to
6 *database* コマンドを発行しないでください。

6 分割ミラー・データベースを先に初期化しないでこのデータベースに接続すると、後の
6 ロールフォワードで必要になるログ・ファイルが消去されてしまいます。

6 その接続によって、データベースは、中断された時点にあった状態に戻ります。中断の
6 時点でデータベースに整合のマークが付けられていると、DB2 UDB はクラッシュ・リ
6 カバリーの必要はないと判断して、後で使用するためにログを空にします。このような
6 事態に陥った場合にロールフォワードを試みると、SQL4970 エラーの原因になります。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアルを更新

DWCTBC データベースと TBC_MD データベースが ODBC に登録されていることの確認:

バージョン 8 では、チュートリアルで使用される TBC_MD である制御データベースは、システム ODBC データ・ソースである必要はありません。ただし、ターゲット・データベースまたはデータベース・ソース DWCTBC は、システム ODBC データ・ソースでなければなりません。

「ウェアハウス・ソースの定義」ノートブックのオープン:

「チュートリアル・リレーショナル・ソース (Tutorial Relational Source)」の「ウェアハウス・ソースの定義」ノートブックをオープンする手順が変更されました。

「チュートリアル・リレーショナル・ソース (Tutorial Relational Source)」の「ウェアハウス・ソースの定義」ノートブックをオープンするには、次のようにします。

1. 「データウェアハウス・センター」ウィンドウから、「ウェアハウス・ソース」フォルダーを右マウス・ボタンでクリックします。
2. 「定義」 --> 「ODBC」 --> 「DB2」 --> 「DB2 ファミリー」をクリックします。

「ウェアハウス・ソースの定義」ノートブックがオープンします。

「ウェアハウス・ターゲットの定義」ノートブックのオープン:

「ウェアハウス・ターゲットの定義」ノートブックをオープンする手順が変更されました。

「ウェアハウス・ターゲットの定義」ノートブックを開くには、以下のようになります。

1. 「データウェアハウス・センター」ウィンドウから、「ウェアハウス・ターゲット」フォルダーを右マウス・ボタンでクリックします。
2. 「定義」 --> 「ODBC」 --> 「DB2」 --> 「DB2 ファミリー」をクリックします。

「ウェアハウス・ターゲットの定義」ノートブックがオープンします。

ウェアハウス・ログ・ファイルのページ限度の設定

ログ・ファイルには、指定のカウント限度に達するまでレコードが収納されます。デフォルトのカウント限度は 1000 個のレコードです。通常、ジョブの実行ごとに 12 から 15 個のログ・レコードが作成されます。各自のニーズにあった数を限度として設定するには、「ウェアハウス・プロパティ」ページの「サーバー」タブ上の「合計レコード数が等しくなったときにログを除去する」フィールドを更新します。

4 **CURSOR ロードに対するデータウェアハウス・センターのサポート**

4 DB2 UDB ロード・ステップでは、ビューまたは表をステップへのソースとして使用で
4 きるようになりました。その結果が `LOAD FROM CURSOR` です。

4 CURSOR ロード用のウィザードで列をマップするために、「**入力ファイルで検出された**
4 **列位置を基に列をマップ**」 ラジオ・ボタンを選択しておく必要があります。

GUI ツール

コントロール・センターのプラグインのサポート

現在、コントロール・センターはカスタム・フォルダーをサポートしています。カスタム・フォルダーには、ユーザー選択のシステムまたはデータベース・オブジェクトを入れることができます。カスタムの folder 専用のコントロール・センター・プラグインを作成することはできませんが、カスタム・フォルダーに収容されるオブジェクトのプラグインを作成することはできます。コントロール・センター・プラグインの詳細は、『コントロール・センター用のプラグイン・アーキテクチャーの紹介』のトピックを参照してください。

メッセージの解説

5 **バージョン 8.1.4 インフォメーション・センター・メッセージ・トピック**

5 DB2 インフォメーション・センターのバージョン 8.1.4 には、新規または変更されたメ
5 ッセージ・トピックはありません。新規または変更されたメッセージ・トピックは、次
5 の IBM Web サイトに掲載されています。

5 <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help>

5 **ADM メッセージの更新情報**

5 ADM5530E は、誤ってエラーに分類されています。これは、警告メッセージに分類され
5 なければなりません。このメッセージは Windows ではイベント・ログに、UNIX では
5 通知ログにエラーとして記録されます。ADM5530E は警告メッセージとして扱う必要が
5 あります。

5 **SQL メッセージの追加**

5 **SQL20271W**

5 名前 *column-or-param-name* のステートメントの中の位置 *number* にある名前は、切り捨
5 てられました。

5 **説明:** 該当するステートメント内の 1 つ以上の名前が切り捨てられました。切り捨て
5 られた最初の名前は、序数位置 "<number>" と名前 "<column-or-param-name>"
5 で識別されます。

5 準備済み照会の describe output を実行している場合、序数位置は照会の選択リ
5 スト列に対する相対位置になります。

5 CALL ステートメントの describe output を実行している場合の序数位置は、
5 CALL の解決先のプロシージャの OUT または INOUT パラメーターに対す
5 る相対位置になります。

5 CALL ステートメントの describe input を実行している場合の序数位置は、
5 CALL の解決先のプロシージャの IN または INOUT パラメーターに対す
5 る相対位置になります。

5 列名またはパラメーター名が長すぎたか、コード・ページ変換後に長くなりす
5 ぎたのが原因です。

5 **ユーザー処置:**

5 列名に関しては、列の名前が正確であることが肝心であるときは、表、ビュー
5 、またはニックネームの名前を変更して、列の名前を短くするようにしてく
5 ださい。あるいは、列名が、サポートされる最大長を超えないようなコード・
5 ページを持つクライアントを使用してください。パラメーター名に関しては、
5 パラメーターの名前が正確であることが肝心であるときは、プロシージャを
5 変更して、パラメーターの名前を短くするようにしてください。あるいは、パ
5 ラメーター名が、サポートされる最大長を超えないようなコード・ページを持
5 つクライアントを使用してください。

5 sqlcode: +20271

5 sqlstate: 01665 列名またはパラメーター名が切り捨てられました。

5 **DBI メッセージの更新情報**

5 **DBI1060E 無効なパッケージ名 <"pkg-name">**

5 **説明:** 間違った名前が入力されました。そのパッケージは存在しないか、または名前
5 が間違えて入力されました。

5 **ユーザー処置:**

5 該当パッケージの名前が配布メディアに存在するかを調べて確認してくださ
5 い。存在する場合は、名前のつづりが誤っていないか確認してください。パッ
5 ケージ名はすべて小文字でなければなりません。

5 **DBI1001I**

5 **使用法:**

```
5 db2icrt [-a AuthType]
5 [-p PortName]
5 [-s InstType]
5 [-w WordWidth]
5 -u FencedID InstName
```

5 **説明:** **db2icrt** コマンドに無効な引き数が入力されました。このコマンドの有効な引き数は以下のとおりです。

5 **-hl-?** 使用情報を表示します。

5 **-d** デバッグ・モードをオンにします。

5 **-a** インスタンスの認証タイプ (SERVER、CLIENT、または SERVER_ENCRYPT) は AuthType です。

5 **-p** PortName は、インスタンスが使用するポート名またはポート番号です。

5 **-s** 作成するインスタンスのタイプ (wse、ese、または client) は InstType です。

5 **-u** Fenced UDF と Fenced ストアード・プロシージャーを実行するユーザーの名前は FencedID です。DB2 UDB クライアントがインストールされてさえいれば、このフラグは不要です。

5 **-w** 作成するインスタンスの幅 (31、32、または 64 ビット) は WordWidth です。適切な幅を選択するには、必要条件のバージョンの DB2 UDB (31 ビット、32 ビット、または 64 ビット) がインストールされている必要があります。幅のデフォルト値は、現行バージョンの DB2 UDB、プラットフォーム、およびインスタンス・タイプがサポートする最小幅 (ビット) です。

5 インスタンスの名前は InstName です。

5 ユーザー処置:

5 このコマンドの詳細については、「インストールおよび構成 補足」マニュアルを参照してください。適切なオプションと引き数を指定して、コマンドを再実行してください。

5 **DBI1170E -w フラグは、可能な入力として 31、32、または 64 だけを受け入れます。**

5 **説明:** **db2icrt** コマンドまたは **db2iupdt** コマンドを使用する場合は、オプション・フラグ **-w** に対して 31、32、または 64 を指定できます。64 ビットのインスタンスを作成する場合は、**db2icrt** に対して **-w 64** を指定します。また、31 または 32 ビットのインスタンスを 64 ビット

トに更新する場合は、**db2iupdt** に対して **-w 64** を指定することでもできます。これらの場合を除き、**-w** フラグは不要です。更新後のビット幅は、DB2 UDB の現行バージョン、プラットフォーム、およびインスタンス・タイプでサポートされているものでなければなりません。

ユーザー処置:

このコマンドの詳細については、「管理ガイド: インプリメンテーション」マニュアルを参照してください。適切なオプションと引き数を指定して、コマンドを再実行してください。

DBI1956E

使用法: `db2ilist [-w 31|32|64] [-p] [-a] [inst_name]`

説明: **db2ilist** コマンドに不正確な引き数が入力されました。このコマンドの有効な引き数は以下のとおりです。

- h** 使用情報を表示します。
- w 31|32|64** 31、32、または 64 ビット・インスタンスをリストします。
-w オプションは **-p** オプションと共に使用でき、**-a** オプションに取り替えられます。
- p** インスタンスの実行の起点である DB2 UDB インストール・パスをリストします。 **-p** オプションは **-a** オプションとともに使用できます。また、**-a** オプションに置き換えられます。
- a** インスタンスと関連した DB2 UDB のインストール・パスや、インスタンスのビット幅情報 (32 または 64) などの関連情報をすべて戻します。

注: DB2 on Linux (S/390、zSeries) の場合、戻された 32 ビットに関する情報は 31 ビットに該当します。

inst_name 指定したインスタンスに関する情報を戻します。インスタンスが指定されていない場合、**db2ilist** は現在の DB2 UDB リリースのすべてのインスタンスに関する情報を戻します。

ユーザー処置:

コマンドを次のように再入力してください。

```
db2ilist [-w 31|32|64] [-p] [-a] [inst_name]
```

5 Query Patroller のヒストリカル・データ生成プログラムの実行より前の Explain 表の作成

5 Query Patroller 用のヒストリカル・データ生成プログラムの実行時に Explain 表が存在
5 しない場合は、この生成プログラムが作成します。ただし、ヒストリカル・データ生成
5 プログラムの実行前に Explain 表を作成することを強くお勧めします。 Explain 表を作
5 成する場合は、いずれも同じパーティションに作成してください。 Explain 表を同一パ
5 ーティションに作成すれば、Explain 機能のパフォーマンスが向上します。それによっ
5 て、ヒストリカル・データ生成プログラムのパフォーマンスも向上します。

5 履歴分析のための Query Patroller ログ・ファイルの検査

5 一定期間の照会アクティビティー (履歴分析) レポートの照会に関して「**Explain**
5 **Run**」列に「**異常実行 (Ran unsuccessfully)**」という状況が表示されている場合、そ
5 の照会の履歴データは生成されていません。このため、その照会は履歴分析レポートま
5 たはグラフに表示されません。バージョン 8 に述べられているとおり、照会が正常に実
5 行されなかった理由を判別するには、`qpuser.log` ファイルを確認してください。

5 `qpuser.log` ファイルを調べる他に、`qpdia.log` ファイルも確認してください。

6 動的照会クラスの更新

6 一部の照会クラス操作では、今後は Query Patroller をいったん停止してから再始動して
6 有効化する必要はなくなりました。

6 下表のアクティブな照会とは、実行中または待機中の状況にある照会のことです。

6 表 9. 照会クラスの変更の有効化の条件

6 更新内容	6 変更の有効化の条件
6 照会クラスの追加、除去、または更新	6 アクティブな照会がない場合、変更はただ 6 ちに有効化されます。
6 「照会の最大数」の変更のみをとまう照 6 会クラスの更新。	6 アクティブな照会があっても、即時に有効 6 化されます。

表9. 照会クラスの変更の有効化の条件 (続き)

更新内容	変更の有効化の条件
<p>「照会の最大コスト」の変更のみをとまなう照会クラスの更新。</p>	<p>アクティブな照会がある場合に更新が有効化されるのは下記の時点です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Query Patroller を停止してから再始動したとき。 • アクティブな照会がもうなくなったとき。 <p>注: 「照会の最大コスト」に対するペンディングの変更があると、その後にくどのような種類の照会クラスの更新も、上記の2つの条件のいずれかが満たされないと有効化されません。</p>
<p>照会クラスの追加または除去。</p>	<p>アクティブな照会がある場合に追加または除去が有効化されるのは下記の時点です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Query Patroller を停止してから再始動したとき。 • アクティブな照会がもうなくなったとき。

ネストされた照会の動作

ネストされた照会をキューに入れることはできません。つまり、ネストされた照会は、通常であればキューに入るはずのしきい値を超えた場合に、即時に実行されます。

ヒストリカル・データ生成プログラムの異常シャットダウン

ヒストリカル・データ生成プログラムを実行していて、異常なやり方でシャットダウンした場合、次回ヒストリカル・データ生成プログラムを実行しようとしたときにエラーを受け取ります。異常シャットダウンの例には次のものがあります。

- DB2 UDB の想定外の停止。
- db2stop force コマンドの発行。
- killdb2 コマンドの発行。

ヒストリカル・データ生成プログラムが異常シャットダウンしたときは、以下のコマンドを発行してから、ヒストリカル・データ生成プログラムの再発行を試みる必要があります。

```
qp -d database generate historical_data stop
```

ただし *database* は、コマンドの実行対象のデータベースを表します。

SQL ステートメント・タイプ別の制限事項

上記の説明とは逆に、以下のステートメントをもつ照会は、キューに入れることができません。

- 静的 SQL とホスト変数をもつ照会
- ID 値関数 (IDENTITY_VAL_LOCAL) またはシーケンス値関数 (NEXT VALUE FOR や PREVIOUS VALUE FOR など) をもつ照会

システム・モニター

DB2_SNAPSHOT_NOAUTH レジストリー変数に取って代わる SYSMON_GROUP データベース・マネージャー構成パラメーター

SYSMON データベース・マネージャー・レベルのグループに属するユーザーは、データベース・システム・モニター・データにアクセスする権限をもっています。

SYSMON 権限グループは、DB2_SNAPSHOT_NOAUTH レジストリー変数を置き換えることで、システム管理またはシステム制御の権限をもたないユーザーが、データベース・システム・モニター・データにアクセスするための手段となります。システム・モニター・データにアクセスするには、スナップショット・モニター API、CLP コマンド、または SQL 表関数を使用します。

SYSMON_GROUP データベース・マネージャー構成パラメーターを使って、SYSMON 権限グループを設定することができます。

SQL の解説

SQL の制限事項

32 ビット・リリースの場合、バッファー・プール内の最大 NPAGES は 1 048 576 に拡大されました。

XML Extender

XMLVARCHAR UDT サイズ限度の撤廃

今後は、データベースを使用可能にする前に、XMLVARCHAR ユーザー定義タイプのサイズを定義できるようになりました。これまでは、データベースを使用可能にしたときに、それ以前に定義された XMLVARCHAR が存在していると、XML Extender は失敗していました。すでに使用可能になったデータベースの XMLVARCHAR UDT のサイズを変更するには、次のようなステップを行います。

1. XML Extender 対応のデータベース内のすべてのデータをバックアップします。

2. すべての XML コレクション表またはすべての XML 列サイド表をドロップします。
3. **dxxadm disable_db** コマンドを使ってデータベースを使用禁止にします。
4. XMLVARCHAR ユーザー定義タイプを作成します。
5. **dxxadm enable_db** コマンドを使ってデータベースを使用可能にします。
6. 表を再作成して再ロードします。

新しい環境変数: DB2DXX_MIN_TMPFILE_SIZE

DB2 XML Extender は、大きな文書を一時ファイルに入れて、処理中にメモリーを使いすぎないようにすることがあります。大容量の物理メモリーを備えたシステムでは、文書を一時ファイルに移動しなくても済むので、入出力アクティビティー量が減ります。環境変数 **DB2DXX_MIN_TMPFILE_SIZE** は、指定の値よりも小さい文書の処理では、一時ファイルではなくメモリー・バッファーを使用するように XML Extender に指示します。この変数は、サーバーでのみ使用でき、クライアントでは使用できません。マルチノード・パーティションに複数の物理ノードが関与している場合、各ノードにインストールされているメモリー容量を正確に反映するように、この変数をノードごとに別々に設定することができます。この環境変数を設定しないと、128KB よりも大きい文書は処理中に一時ファイルに入れられるのに対して、128KB よりも小さい文書はメモリー内で処理されます。

付録 A. DB2 UDB フィックスパック CD のディレクトリー構造

Windows オペレーティング・システム

フィックスパック CD 内のファイルは以下の場所にあります。

表 10. Windows ファイル

ファイル	ロケーション
DB2 製品ファイル	x:\db2
インストール情報	x:\doc\<language>\install.txt
インストール情報 (HTML)	x:\doc\<language>\install.htm
ライセンス・ファイル	x:\db2\license
リリース情報	x:\doc\<language>\release.txt
リリース情報 (HTML)	x:\doc\<language>\db2ir\index.htm

UNIX オペレーティング・システム

フィックスパック CD 内のファイルは以下の場所にあります。

表 11. UNIX ファイル

ファイル	ロケーション
DB2 製品ファイル	/cdrom/db2
インストール情報	/cdrom/doc/<language>/install.txt
インストール情報 (HTML)	/cdrom/doc/<language>/install.htm
ライセンス・ファイル	/cdrom/db2/license
リリース情報	/cdrom/doc/<language>/release.txt
リリース情報 (HTML)	/cdrom/doc/<language>/db2ir/index.htm

詳細は次のとおりです。

- x は、ご使用の CD ドライブを表します (Windows)。
- /cdrom は、ご使用のマウント・ポイントを表します (UNIX)。

- <language> は、言語ディレクトリーを表します。以下のリスト内の言語のうちの 1 つに対応する 5 文字のコードで構成されます。

表 12. ディレクトリー名とそれに対応する言語

ディレクトリー	言語
ar_AA	アラビア語
bg_BG	ブルガリア語
cs_CZ	チェコ語
da_DK	デンマーク語
de_DE	ドイツ語
el_GR	ギリシャ語
en_US	英語
es_ES	スペイン語
fi_FI	フィンランド語
fr_FR	フランス語
hr_HR	クロアチア語
hu_HU	ハンガリー語
it_IT	イタリア語
iw_IL	ヘブライ語
ja_JP	日本語
ko_KR	韓国語
nl_NL	オランダ語
no_NO	ノルウェー語
pl_PL	ポーランド語
pt_BR	ブラジル・ポルトガル語
pt_PT	ポルトガル語
ro_RO	ルーマニア語
ru_RU	ロシア語
sk_SK	スロバキア語
sl_SI	スロベニア語
sv_SE	スウェーデン語
tr_TR	トルコ語
zh_CN	中国語 (簡体字)
zh_TW	中国語 (繁体字)

注:

1. ディレクトリー名は、オペレーティング・システムに応じて大文字または小文字で表示されます。
2. すべての言語ディレクトリーがすべての CD 内に用意されているとは限らないため、上記のリスト中のディレクトリーがすべてこの CD 上に表示されるわけではありません。

付録 B. IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、[IBM Worldwide ページ](#) (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。

付録 C. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームの

アプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). Portions of this code are derived from IBM Corp. Sample Programs. © Copyright IBM Corp. _2004_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12